

# AKIBA'S TRIP ~キミを探してこの街へ~

桐生 亂桐（アジフライ）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

秋葉原で巻き起こる、大きな事件

彼女の願いを叶えるか、彼女の願いを無に帰すか  
そこにあるのは、ただ純粋な想い「願い」だけ――

とあるの外伝的小説です

とあるがタグにありますがあんま出てこないかも  
残酷な描写はあるか分かんないですけど念のため  
タグは随時更新予定

ていうかこのゲームを知っている方はいるのでしょうか?:

目 次

#1	全ての始まり	1
#2	勧誘	
#3	邂逅	
#4	阿倍野優 前編	
#4	阿倍野優 後編	
#5	黒髪の少女	
#6	“シンディ”を求めて	
#7	JKVを撃破せよ	
#8	リベンジマッチ	
#9	コードネーム「エツクス」	
#10	穩健派	

100 93 85 75 67 51 38 31 18 10 1

## #1 全ての始まり

秋葉原

戦後の高度経済成長時代から現代に至るまで、常に時代の最先端に位置する街にして、人々の欲望を満たし、生み出してきた特異な地域そんな秋葉原を舞台に様々な噂があつた

美男美女によるオタク狩りが行われている

街のどこかで、非公式なバイトを凱旋する男がいる  
どんな情報も手に入れるスゴ腕ハツカー集団がいて、依頼するには金とは違うまた別の何かが必要になる

金とは違うまだ別の何かが必要になる  
夜になると人を襲い、血を吸う奴らがいる

⋮どれも総じて嘘っぽく、だけど、嘘だと言い切れない、そんなありきたりな噂の数々

秋葉原に住む少年——須藤真一は秋葉原に在する無難な進学校へと通い、平凡な日々を送っていた

ある日

その進学校の友達から珍しく電話がかかってきた

友人はとにかくアニメが好きで、休みの日は連日秋葉原へと繰り出している、いわゆるオタクだ

真一もアニメは見るがファイギュアなどを集める気はない

が、たまにその友人から一緒に秋葉原へと身を乗り出す事はあった  
秋葉原の人たちは暖かく、案外過ごしやすいと感じたのはつい最近の事だ

⋮話が逸れた

で、そんな友人から電話がかかつてきただの

〈聞こえるか!? 今俺はアキバで、あの噂は…!!、あ、いやそれよりさ、俺の…俺のPCの、PCの中のDドライブを消し——〉

そんな謎な言葉を言い残し、電話は切れた

最初は何かのイタズラかと思ったが、翌日学校へ登校して、その疑心は確信へと変わった

その友人が行方不明になつたのだ

恐らくは、秋葉原の噂を調べてくうちに何らかの真実を掴んでしまったのだろう

そう考えた真一は学校が終わると同時に、その友人の自宅に訪問した友人は学生寮に一人暮らしだ寮長にそのことを話したらすんなりとその部屋へ案内してくれた「…アソツのPCは…、これが」

目的のPCを見つけるとマウスを操作し、クリックすると画面には一枚の写真が映し出された

人間とは思えないほど美しく、透き通った白い肌の女の子の写真「…、」

写真だが、見とれてしまっていた

その見目麗しい姿に、一瞬だが確実に心が奪われてしまっていた「…て、違う違う…！」

慌てて頭を振り払いながら情報を得ようとその写真の様々なところを見る

その写真をよく見てみると背景には見覚えがあつた

秋葉原だ

「…秋葉原、か…」

最近妙な噂が立ち込む秋葉原

しかし多少ながらの興味はあつた

「行つてみる価値はあるな、秋葉原に…」

マウスから手を離すと誰にともなく呟いた

…どうやら、全て秋葉原にあるみたいだ

◆◆◆

ある夜、真一は友人を捜すべく秋葉原へと足を運んだ

また、友人を捜す前に、一応秋葉原の知人には連絡を入れようと思つてある場所を訪れた

「ヤタベさん」

「あ、真一くん」

真一が声をかけるとジャンクパートの整理を止めて、帽子を被り、

眼鏡をかけた人当たりの良さそうなおじさんがこちらを向く

「友達を捜しにいくんだね？」

「はい。もしかしたらなんてないかもしないんですけど…」

「いやいや、甘く見ちゃダメだよ真一くん。何があるのかわからないうがここ秋葉原なのだから」

「ヤタベさんの言う通りです、真一様」

真一にそう言つたのはサラというメイドだ

…ここで語る事ができないくらい、謎なカリスマメイドである

そう、カリスマメイド

…大事な事なので二回言いました

「もしよろしければ、ご主人様御用達の護身術を簡単にレクチャーで

きますが」

「間に合つてますよ。お気持ちだけ受け取つておきます」

真一がそう言うと「そうですか…」と少し寂しげにうつむいた

…ちょっと良心が痛んだ

「ゴンちゃんとノブさんは？」

とりあえずヤタベさんにまた聞いてみる

「ゴンちゃんは…、そうだ、カメラのフィルム買いに行つてて、ノブくんは確か…、あ、「ITウイツチまりあ」のグッズを買いに行つてるんじゃないかな」

「あー。なんか出ますよね、確かフイギュアでしたつけ」

ITウイツチまりあとは現在放送中の人気アニメだ

まあ詳しくは知らないが、真一もよく見てるアニメの一つだ  
だが二人とも出かけてるとなるとけつこうかかる

「じゃあ俺、そろそろ行きますね」

とりあえず伝えるべき人には伝えたので真一はヤタベにそう言つた

「わかった。けど、気をつけるんだよ」

心配するヤタベに頷きながら真一はその場を後にした

◇◇◇

夜の秋葉原は、未だに人通りが多い

流石最大の電気街

とりあえずなにか情報はないか、と思つて真一は携帯の“ぽつり。”を覗いてみる

ぽつり。とは早い話ツイッターのようなアプリであり、割と使用している人もいるのではないかろうか

「…」の辺りの路地裏…、かな」

割とひつそりとした路地裏

ゴミ袋などが散乱してゐる中、その細い路地裏を突き進む

「——へえ、そつちから来てくれるなんて、有り難いじゃねえか」

聞き慣れない声が聞こえたと思つたとき、真一は壁に叩きつけられた

「がはつ!?

自慢ではないが、割と真一は喧嘩に慣れている

副業として便利屋なるものをしてゐるが、ときたま暴力沙汰になつてしまふ事もたまにある

…本当にたまにだが

そんな時に力で無力化し、話を進める、というのが何回かあつた  
それだけでなく、カツアゲ等が頻繁に起ころゆえ、体は割と鍛えて  
はいたのだが

(気配が、全く…!?)

襲撃してきた相手は気配はおろか音もなく現れて真一に一撃を与えたのだ

「おつと…、やりすぎちまつたか！ 悪いなあ、人間相手に手加減なんて器用な真似できなくてなあ」

朦朧とする意識の中、顔だけでも見ようと上を向く

相手は銀髪で目の下に若干の隈…、そういうメイクだろうか

服装はどこぞのロツカーミみたいな服装で、ギターなんかが似合いそうだ

「おおかた、仲間を捜しに来たらしいが、残念だつたなあ。あ、最近ここで吸血したといえば…、アイツくらいなもんか」

銀髪ロツカーハーがある一点に顔を向けた

そこにはぐつたりと倒れている人物

——友人だ

「誰にも見つけられなかつたんで、飲まず食わずにへばつてゐみてえ  
だが…ま、お前よりは元気そうだぜ。くははっ」

笑い方が癪に触る

だが、うまく体が動かない

「よおく見ておけ、俺が血を吸えば、すぐにお前も同じようになる。：  
俺たちと同類になるんだ」

そう言つて歩み寄り、ぐい、と真一の体を持ち上げようとしたところで

「…兄さん。待つて」

また別の声

かろうじて顔を声の方へ向ける

そこには友人のパソコンの画像で見た、あの少女がいた  
見間違うものか

あんな美少女、このご時世そうはいない

「…あ？ 何だ瑠衣。何しに来た」

「…その人を、逃がしてあげて」

「はあ？ おま、何言つてんだよ」

ロツカーハーは少女の言い分にイライラしているようだ

あまり仲は良くないのだろうか

「今週はすでに十分な人数を吸血しているはず。彼の血まで吸う必要  
は——」

「つたく。お前は相変わらず意味わかんねえヤツだな。ここまでやつ  
て何もしないで放り出すわけねえだろうが」

「それでも、その人は…」

会話の内容ははつきり言つて意味がわからないものだつた  
だがしばらく放置されていたおかげでだいぶ体力も回復した

なんとか力を絞り出してゆっくりと立ち上がる

：せめて、友人だけでも路地裏から引っ張りださないと

「ほら、無駄話してるうちに起き上がりつちまつたぞ。もたもたしてると逃げられ——おつと、こりや立派だ。まだ仲間を助けるつもりでいるぜ」

「…、」

銀髪ロツカーに何かを言われるが、あまり聞こえていなかつた  
ただ、あの少女の視線だけはなんとなく感じていた

「…情けねえなあ、人間は。…覚悟しろ」

「！ 兄さんつ！」

「…え？」

気づいた時はもう遅かつた

「——かはつ!?」

ドゴオ！ と肉を抉るような一撃が真一に直撃した

防ぐ事も、避ける事も出来ずにただ、もう事しかできなかつた  
再び壁に叩きつけられ、そのまま倒れ伏す

「おつと。殺つちまつたか？ 仲間なんて置いてさつさと逃げれば良いものを」

倒れる伏す真一を見下し面白おかしく笑いながらそんな事を言う

「…りや血を吸つてももう意味ねえな。…人間はな、俺たちと違つて  
これつくれえで死ぬんだよ」

「…そんなん…！」

倒れる真一を見ながら少女は呟いた

「…たく…。これだからガキは。俺はもう行くぜ、そこの二人は重ね  
て適当に放置しておけば、喧嘩して互いにぶつ倒れたように見えんだ  
ろ」

そう言うと口角を吊り上げて

「…なんせ、最近の秋葉原はやたらと物騒だからな。…「俺たちのおか  
げ」で。うはははははつ！」

最後に高らかに笑いながら銀髪はその場から立ち去つていった

「…、」

残された少女は倒れた真一を見る  
そして悲しそうに目を伏せて

「…めん、私たちのせいで、せつかく君は…」

「…、う…」

「！ まだ、生きてる」

少女はかすかに聞こえた彼の声を聞き取った  
「人間なら、死ぬ。…だけど、私たちなら…」

少女は何かを思案するように考える仕草をしたあと  
「よし。…なにか、刃物は…、あるわけ、ないか。歯で唇を切るしか…」  
少女は口の中を少しもごもごと動かす

「…つ！ …ん」

軽い痛みに耐えながら少女は倒れている真一へと歩み寄る  
そして彼女は、自分の唇を彼の唇に押し付けた

学園都市

夕暮れ時の伽藍の堂

蒼崎燈子は対面に座る鏡祢アラタに話をしていた

「…いろいろ？ …なにそれ」

「正式名称 “National Intelligence and Research Organization” …それを略して  
N.I.R.O.だ。…まあ覚えていくなら二口と呼べ」

「いや、それ通称をローマ字読みしただけじやん。…まあいいけど。  
本題はなんなんだ？」

問われた燈子はふむ、と首を頷かせ徐に立ち上がった

そしてコーヒー ポットへと足を運び、コーヒーを淹れながら彼女は  
呟いた

「お前には秋葉原に行つてもらう」

「は？」

脳内がフリーズする

今この橙色の魔術師は何をいったのだろう

「つうか秋葉原つて。そこでなんかやる事でもあんのかよ」

「あるからお前を呼んだんだ。…あちらも最初は単純な建築業を依頼してきたんだが…何やら、あちら側の状況が変わつてな。可能なら助つ人的な人材を一人寄越してくれないか、と要求してきたんだ」

自分のコーヒーを置いて再び燈子は椅子に座る

カツプに口をつけて一息つくと

「最初は私も断ろうかと思つていたんだ。…けど、このナイロという組織、どうにも胡散臭い」

「胡散臭いって…」

そう思つてるならなんでこんな依頼引き受けたのか  
「このナイロを統率している男…瀬嶋といったか。一度会つた時があつてね。…その時感じた胡散臭さがどうにも拭えん。だからお前にこれを任せたい」

…簡単に言うならナイロという組織が怪しいからちょっと潜入捜査してこい、と

そんな感じなのだろうか

「…別にいいけど、今四月だろ。流石に学校休んでまでは…」

「そこは問題ない。私が月詠さんに掛け合つて夏休みに何日か補習に来ればいいとさ」

「ああ、それなら安心…いや、マテや」

今なんといつたこの魔法使い

「てか、え!? 小萌先生と知り合いなの!?」

「飲み友達だよ。たまに屋台で一杯ひつかけるんだ」

衝撃の事実

てゆうか能力査定ではダメダメだからせめて勉学くらいは真面目にやつていたのにもう補習が確定してしまうとは軽く鬱である

その時はあんまり重く考えてはいなかつた  
だが、それが秋葉原を巻き込んでの大騒動になるとは誰も思つてい  
なかつた

## #2 勧誘

ふと、目が覚めた  
ぼう、とする視界の中頭は状況を理解しようと辺りを見回す  
ここはどこだろうか？

首だけを回して内装を確かめてみる  
左右に一つずつ、背面の壁に二つ鉄格子に阻まれた窓があるシンプルすぎる作りだ

今度は立ち上がりようとするが上手く動かない  
いや、それ以前に自分の身体はパイプ椅子に縛り付けられており、  
何故だか下着姿の薄着状態だ

通りで肌寒いわけだ

何とか外してみようともぞもぞと動かしてみる

しかし人間一人の力ではしつかし縛られた縄をちぎる事かなわず、  
あえなく断念した

今度はこの壁の向こうに意識するように耳を澄ましてみると  
した

すると出入り口に近い位置から話し声が聞こえてくる

…どうだ。彼は気がついたか？

…はい。たつた今、目が覚めました

…検査の結果は？

…時間の都合上簡単なものが、間違いありません。カゲヤシ化  
しています。しかもかなり劇的な変化を遂げており、傷ももう完全に  
塞がっています

…流石は眷族の血…、凄まじいものだな。どれ、直に見てみると  
よう

そんな会話がなされた後、扉が開き中に二人の男女が入ってきた  
一人は帽子を被りスースーを着込んだ男性…年齢は四十代半ばと  
いったところか  
もう一人はポニー・テールが特徴的な眼鏡をかけた女性…こちらは  
二十代前半、といった感じだ

男性は品定めをするようにじろりと自分の身体を見やる

一しきり見ると男性は「フ…」と小さく咳き

確かに。これは並ではないな…」

どこまでもモノとしかい加減イラついた

真一は敵意を込めた眼差しで男性を睨みつけ

「…なんだ。アンタたち」

「そう身構えるな。楽にしろ」

男性は言う

しかし状況が状況であり楽になんてできる筈はない

だが自分も椅子に縛られている状態では何にもできない

仕方なく相手のいう事に従うことにした

「話をしよう」

男性は話す

「私は瀬嶋隆一。我々は“国内情報調査機構”という組織に属する者

だ。：確かに、通称は――  
「National Intelligence Service」という組織に属する者  
Researc h Organizationから、イニシャルを  
とつて、通称N I R Oと呼ばれます」

隣の女性から補足を聞いた瀬嶋はああ、と思い出したような顔をして

「そうだそうだ。…そんな名前だつたな」

「瀬嶋さん」

そんな瀬嶋を女性が論すように声を上げる

それに特に反応することなく

「構わんだろう？…彼女は御堂聰子。まあ雰囲気で分かるが、私の  
部下だ」

そう言われた御堂はその場で一つ礼をする

「一般には公開されていない組織だ。…まあ、日本を守るために特殊  
のようなものだと思つてくれ」

先ほどからいろいろと話してはいるが内容の半分も真一は理解で

きていない

とりあえず、瀬嶋と御堂、ナイロについては大まかに理解したつもりではいるのだが

「…さて。まず君は今特殊な状況にいることを理解してもらいたい」  
むしろ特殊すぎてわけわかんないですけど

「まあ確かに状況も特殊だが、一番特殊なのは、君の身体に起こつてゐる変化のことだ」

そして瀬嶋はこれまでに起こつた出来事を順を追つて話し始めた  
「昨夜、私の部下がある男を追跡しているとき、君は現れた。覚えてい  
るだろう？　あの路地裏を」

そう言われ真一は頷く

あの変な白髪ロツカーリ襲撃された場所だ

「君は部下によるとほとんど瀕死といえる状態だつたそうだ。最初の  
うちはな」

最初のうち…？

それは一体どういう事だらうか

真一の表情からそれを読み取つたのか瀬嶋は続ける

「怪我を負つた君はある少女から血を飲まされた。それは一時的とはいえ人間を別の生き物へと変貌させるかなり特殊な血液だ」

そう言えばわずかばかり記憶が残つてゐる

消え入る意識の中、微かに触れた唇の感触、喉を嚥下していく粘つ  
こい鉄の味…

まさかその少女はキスで血を飲ませたのか、と今更ながら理解した  
「その生物は大きな問題を抱えて、こそいるが、高い身体能力を備え、極  
めて高い生命力を有してゐる。…君は彼女から血を分け与えられ、そ  
れに伴いそれらの特性すべてを得て傷を回復させたんだ」

「…どういうことだ」

「君とて聞いたことがあるだろう。人を襲い、血を吸う人ならざる者

…」

「まさか…その噂は真実だつていうのかよ？」

瀬嶋はゆつくりと首を縦に振り

「そうだ。君が出会ったのはその噂のものたちだ。彼女らは言うなればいわば妖精の類：正解に言えばはるか昔から存在する日本の固有種で実在する生物だ。とても人間に似ているがね」

瀬嶋は一度言葉を区切つて

「陰妖来<sup>カゲヤシ</sup>、と呼ばれている。今こうしている間にも人間を襲い、血を吸っている頃だろう。まあそれだけなら大した事はない」

大したことはない、と言つたかこの男は

人を襲い、あまつさえ吸血すつというその惨事を斬り捨てたのか？「蚊が円滑に血を吸うにはまず特殊な体液を注入するが、同じように彼女たちも似た事をする。蚊はかゆくなるだけだが、カゲヤシに血を吸われたものたちは、みんな一様に極めて強い倦怠感を抱き、日光にさえ敏感に反応する特殊体質になる…この意味が、わかるかね」

日光に反応してしまふという事は外に出ることが出来なくなる、という事

それでいて倦怠感が身体を襲うという事は…

「…引きこもりになるってことか」

「そうだ、察しがいいな。何もせず無気力に時間が過ぎるのをただひたすらに待つだけの状態だ。…たとえ長い時間の先に回復したとしても今の日本の社会制度では社会復帰は難しいだろうな。職歴のない若者では尚更だ。カゲヤシはこの作用を利用して、秋葉原で次々と襲つている。『引きこもり化計画』などという、ふざけた名前を付けてな」

場に重い空気が漂う

そんな事を気にするでもなく瀬嶋は続けていく

「これが社会にとつて有害であることは疑いようのない事実だろう。

…そこでキミに頼みだ」

瀬嶋の視線が真一を捉える

「どのような理由からはわからんが、君はカゲヤシに娘の血を摂取させられた。一時的ではあるが、君の身体はカゲヤシ化し、大きな力を得てゐるわけだ。…消耗が激しい我々にとつてはとても魅力的なんだよ。わかるだろう？　どうか、我々ナイトに協力しカゲヤシから秋

葉原を守ってくれないだろうか。無論、報酬は払おう。…どうかね」  
「どうかね、と瀬嶋は聞いてくるがこんなモノ一択しかないではない  
か

そんな詳細を聞かされた上で断つたりなどしたら消されかねない  
どう考えても首を縊に振る以外なかつた

「…わかつた。協力する」

「…いいだろ、御堂、彼の拘束を解いてやれ」

瀬嶋は御堂へ指示すると縄が解かれてようやく自由になる  
縄が解かれた後真一は瀬嶋へと視線を向けた

「いやなに。承諾してくれてよかつたよ。ここはよく日が差し込むか  
らね、断ろうものなら、ここでキミを塵にしてやるつもりだつたんだ。  
いろいろ知つてしまつたからね」

そう言つて僅かばかりに瀬嶋は笑んだ  
裏に何か考えてそうな、外道の笑み

真一は内心舌を打つ

「さて。とにかく一旦帰りたまえ。詳細は明日、御堂くんから聞くと  
いい。あの秋葉原自警団とかいう連中も協力してくれるそうだし、明  
日から忙しくなるぞ。今はゆつくり休みたまえ」

ヤタベさん達も協力してくれるのか

これは少し安心した気分だ

このまま知人がいない状況で仕事などできそうになかつたからだ  
「言い忘れるところだつたが、明日以降決して露出の高い服を着ては  
いけない。…まあ手や顔と蚊なら問題ないが、間違つても全裸はマズ  
イ。…今の君なら、塵と化すだろう」

それ以前に全裸で街など歩くものか

例えが酷いぞこの組織

◇◇◇

鏡祢アラタは秋葉原という町並みに驚愕していた  
行き交う人々、そびえ立つ建物…  
どれをとっても予想のはるか斜め上を行つていた  
耳にはやけにカレー・パンを押す歌が聞こえてくる

カレー好きな自分としては食べざるを得ない

「ていうか雑踏がすごいな…。舐めてたぜ秋葉原」

あとで学園都市にいる友人たちにお土産でも買って帰ろう

しかし今はカレーパンだ

アラタは売り子の女の子に近寄ると

「すいません、カレーパン一個ください」

「はーい、一つ百二十円でーす」

売り子から値段を聞くとその手に百二十円を置いてカレーパンを受け取る

出来立てなのかそのカレーパンはまだほんのりと温かく、衣もまだサクサクしてそうだ

街の中を歩きながらその包みを開けて、カレーパンにかじりつく「…うん、美味しい」

衣はサクサク、中はふわふわでカレーがトロリとしている

辛さはもうちょっと欲しいところだが今はさほど気にはならない

カレーの具はシンプルにジャガイモと人参と定番の品

しかし逆にそれがこのカレーパンの味を引き立てていると言つてもいいだろう

サクサクとそのカレーパンに没頭していると携帯がピリリとなつた

せっかくのカレーパンタイムを邪魔されちよつとイラッと來たがディスプレイに移された名前を見て落ち着いた

名前は御堂聰子

そう言えば昨日こつちに來たときに連絡先を交換していたことを忘れていた

アラタは通話ボタンを押して耳に当てる

「アラタさん？ よかつた、つながつて」

「あ、いえ。それで何か御用ですか」

「いえ、用と言う用ではないんですけど…アラタさんにも一応報告しておこうと思つて」

だつたら電話してくんなど言いたい気持ちを抑え、ゆっくりと御堂

に質問する

「報告?」

「ええ。本日裏通りにある秋葉原自警団のアジトに集まる予定となっています。十時ごろを目安に、貴方もアジトに来てください。その時に以前言っていたエージェントの方もご紹介します」

エージェント：

そう言えばそんな話を聞いた気がする

なんでも敵の一族であるカゲヤシと同等の力を得たエージェントだとか

「了解です。他に用件は」

「いえ、後はありません。ではそれまでゆっくりしていくください」

そう短く言って御堂からの電話は切れた

アラタも電源ボタンを押し通話を切ると再びポケットに入れる

「…さて、それじゃ時間まで暇を潰そうかな」

適当に見回すとコンビニに目が行つた

店内に入つて商品棚を見て

「おでん缶…！ そういうものもあるのか」

やる気になれば学園都市でも再現できそうな商品に一人びっくりしていた

◇

じりじりと太陽の光が露出した顔や手を焼いていく

しかしそれらは別に耐えれない事でもなく、慣れていけば特に問題はなかつた

まさかそんなところを守るために炎天下の中手袋なんてしたくな

い、つけたらつけたで蒸れるに決まつてる

「…どうしようか」

真一は大きく背を伸ばし、何気なく携帯を覗いてみる  
ぽつり。は昨日のまま、まだ更新されていない

それを仕舞おうとしたとき、携帯が鳴つた

真一がディスプレイを見てみるとそこには御堂聰子の名前があつ

た

携帯の操作し耳に当てる

〈真一さん。お身体の方は大丈夫ですか?〉

「ええ。おかげ様で:」

〈現在私は秋葉原自警団と名乗る人たちのアジトにお邪魔させても  
らっております。いろいろお話することができますから真一さんも  
来て下さい〉

「ああ、わかりました」

〈場所は知つてると思いますが、念のため私は裏通りの入り口でお待  
ちしています。それでは〉

「はい。またその時に」

そんな会話の後、携帯を切つてポケットへと戻した

軽く息を吐きながら真一は歩を進める

そこで真一は、一人の男と出会うことになる

### #3 邂逅

裏通りに位置する秋葉原自警団の秘密基地

アジト、と言つた方がいいのかは分からないうが一応今回は秘密基地を言つておく

内装は右上辺りにカウンターがあつて手前にテーブルが一つずつ位置している

そしてなぜだかメイド服が多くかけられており、ぶつちやけ秘密基地よりはメイド喫茶と言つたような表現がピッタリかもしれない

現にメイドいるし

そう思いながらアラタはちらりとサラさんに視線をやる  
ここにはサラさん以外にもメンバーがいる

先ほど軽く自己紹介した程度ではあるが

確かノブくんにゴンちゃん、そしてヤタベさんと個性的なメンバー

だ

正直堅苦しいナイロよりこういったオープンな雰囲気な場所の方がアラタにはあつている

サラさんはそんなアラタの内心を察したのかすすすつ、とアラタに近寄り

「何かご注文はござりますか？」

と言つてくれた

「い、いえ！ もしかして、顔に出てましたか？」

「いえ、ご主人さまの要望を顔で察することなど、造作もありません」

秋葉原半端ねえ

忍者か何かのか秋葉原のメイドは

しばらくして入り口の方から御堂聰子に連れられて一人の青年が入ってきた

◇

聰子に案内されるまま真一は自警団の秘密基地へと帰ってきた

あんまり変わつてなくて嬉しい限りである

「とりあえず、顔を見る限りでは憔悴してる様子はないですね」

「ええ。…まあ、いつも通りですよ」

そう返すと聰子はフフ、と笑つて

「タフなんですね。素晴らしい。…それでは、改めて自己紹介としま  
しょう」

聰子はくいっと眼鏡を上げて

「私は御堂聰子。瀬嶋さんの命により、貴方の面倒を見るように言わ  
れています。そしてこちら——」

聰子はテーブルでもふもふとオムライスを食べる青年に手をやつ  
て

「こちらは臨時の鏡祢アラタさん。…一応、貴方の同期になります。  
…アラタさん…その、何か言つてくださいと…」

するとアラタと呼ばれた青年…いや、恐らく高校生という年齢だか  
ら少年と言つた感じか…が氣怠そうに立ち上がり

「…んと、まあよろしく」

そうそつけない返事と共に彼は真一に向かつて手を差し伸べた

握手のサインだ

真一はその手を握るとアラタも握り返す

二人の握手が終わつたタイミングを見計らつて聰子が再び口を開  
く

「上からの指示は、基本私を通して伝わります。楽な事ばかりではな  
いと思いますが…あなたが田が好きなこの街を、そして社会をより良  
くするために、頑張りましょうね」

ちなみにこれはちゃんとしたお仕事らしく、何と報酬もあるとい  
う正直、いつもの通り情報屋から何か仕事を貰うつもりだったが意外  
である

まあその辺に至つてはまたおいおいメールするそうだ

「…それより…彼らなんですが…」

そう言つておずおずと言つた様子で聰子は辺りを見回し自警団の  
メンバーを見やつた

すると途端になんか気まずい空気がその場に漂つてきた

そんな空気を察したのか、ノブくんとゴンちゃんが真一に向かつて

歩いてきて

「と、とりあえず名前だけは言い合つたんだけど…、ほ、ほら、初対面だから…」

「なんかお堅い人みたいでちよつと。あつちの少年とは割とすぐ打ち解けられたんだけどねえ…サラさんも相変わらずだし」

確かに聰子はちょっと硬い雰囲気を持っているという事はなんとなく出会つた当初からわかつてた

しかしサラさんはいつもと変わらず佇んでるばかりで会話をあまりすることなく…この時間が来たらしい

「いやあ…私もがんばつてみたんだけど、共通の話題が一つもないんだ」

ヤタベさんも困り顔だ

実際初対面な人と一緒になつたらこうなつて仕方ないとは思う  
そりやあお互いに聞きたいことはあるはずだが、いきなりそれから話すのはなんか違う気がする

「あ、あのー…」

恐る恐ると言つた様子で聰子が聞いてきた

「自警団の方々にも、説明するように言われてます。その、よかつたら…真一さんからご紹介いただけますか？」

そう言われて真一はハア、と息を吐く  
とりあえず一人ずつ、紹介していこう

増す真一はヤタベの隣に立つた

「じゃあ、まずはヤタベさんから」

「改めてどうも、ヤタベです」

「コホン、と息を吐きながら真一は付け足す

「秋葉原の事なら何でも知つてますから、困つたらぜひ頼つてあげてください」

「ちよつと真一くん⁈ いくらなんでもそれは持ち上げすぎだよ。…まあ闇市があつたころから秋葉原にはいるけど…あ、でも顔は広いから知り合いは多いですよ。秋葉原にあるお店なら大体知つてるから美味しいお店とか紹介できるよ。たとえば、無骨だけどうまいコー

ヒーを出してくれるマスターの喫茶店、とかね」

一通り話したあと、今度はアラタはゴンの隣へ歩いて行つた

「それじゃ、お次はゴンちゃん」

「え、えーっと…真一も言つてたけど…ゴンつて言います」

今度も付け足す

「ゴンちゃんのカメラの腕はプロレベルなんです。写真がほしくなつたらぜひ頼つてください」

「あ、ありがとうございます。でも、やっぱりまだまだよ僕は」

そしてゴンは何かに思いを拭けるように

「花の命は短い…美しいがゆえに儂い…アキバ系のアイドルは特に。その輝いてる一瞬を磨くために、僕はもつと腕を磨こうと思ひます…！」

言つてる事はカツコいいのだが

まあ、それがゴンちゃんのいい所なのかもしないんだが

そして次はノブの隣に歩いていき

「次はノブくんですね」

「二度目ですが、どうも。ノブです」

そして付け足す

「彼は、まあアニメや漫画を好む親しみやすい人ですね」

「俺は若干マイナー物が好きかなあ。大衆向けのはなんか薄いついでうか、無難で古臭い手法のばっかりで。ちなみに口リのクーデレが好きです」

…黙つていれば本当にカツコいいんだがね、と内心呟く真一

最後に真一はサラの隣へと歩いていき

「最後はサラさんを」

「サラと言います。どうかよろしくお願ひします」

そして付け足す

付け足すと言つてもサラさんに至つてはあんまりわかんないから頭に浮かんだ言葉を言つていく

「サラさんは…すごく、カリスマメイドです」

「正統派メイドカフェ、『エディンバラ』でメイド長をやらせていた

だいてます。ぜひ一度、ご来店ください。また当店以外にもご主人様、お嬢様のご嗜好にに合わせたお店も紹介できます。ご要望がございましたら何なりとお申し付けください」

とりあえずこれで一通り紹介は終わつたと思う

どうですか、と聞くために真一は聰子へと視線をやつて

「…な、なるほど。ありがとうございました」

若干引いてるじゃないですかやだー

「と、とりあえず、こちらの方たちにもいろいろと説明しないといけないのですが…真一さん、貴方は鏡祢さんと先に駅前に行つてもらえますか？」

そんな指令を真一に下す

と、なると彼と二人つきりで駅前に向かうという事だ正直不安ではある

しかしそんな事を口にしたところで多分頑張つてください的な事しか言つてくれないと思うから黙つておく

「詳しくは後ほど。では」

聰子はそう言つて他の自警団のメンバーに説明を始めた  
どうやら先に行かないダメなようだ

そんな真一にアラタは近寄つて軽く肩を叩かれる

「駅前だつけ？ 行こうぜ」

そう気さくに声をかけアラタは出入り口に向かつて歩き出す  
真一は彼の背中を軽く息を吐きながら追っかけた



駅前を歩く道中

「アンタも、面倒なことに巻き込まれた口か？」

不意にアラタが声をかけてきた

面倒な事、というのはやはりナイロに関する事だらうか

「つて言うか、そう言うアンタも？」

「まあそうだな。俺は巻き込まれたというか、頼まれたというか」

「いぶんどつちつかずだな、と内心思いながら結構親しみやすい感覚に気づく

やはりナイロの連中みたいな堅苦しい奴らよりもこういったフランクな人の方が気が楽だ

「…気をつけろよ」

「え？」

アラタが突然真剣な声色でしゃべりかける

真一が問い合わせると彼は真面目な顔つきでこう言つてきた

「あの組織、何か裏がある」

「裏があるって…確かに瀬嶋つて奴はすげえ怪しいけど…聰子さんは」

「あの女の人はどうでもいいよ。たぶん、胡散臭いのは瀬嶋だ」

彼は腕を組みながら

「あの男…絶対に裏に何か隠してる」

どうやらアラタはナイロについて何か思うことがあるようだ

しかしそれには真一も賛成ではあるが立場上すんなりと返答できない

「ま、ゆつくり考えようぜ」

アラタはそういうて大きく背伸びをする

そうこうしている内に真一たちは駅前についた

やはり目を見張るのが目の前にある大きなビルだ

「それにしても秋葉原つてすげえよなあ」

「あれ、初めてなのか？」

そう聞くと「ああ」と頷きながらそのビルを凝視する

「良かつたら案内しようか？」

「マジで!? 正直一人でこの街歩くのは大変だなあつて思つてたんだよ」

アラタは今日恐らく初めて見せたであろう笑顔を見せた

そう言う笑顔を見せられると案内のし甲斐がある

そんな時である

「おい。そこのお前たち」

不意に声をかけられた

バンドマンのような服を着てヘッドホンをかけてしかも顔にマスク

クまでをかけているという明らかに怪しい男が話しかけてきた

(…知り合いか?)

(まさか。こんな怪しい奴いねえよおれのダチに)

小さい声で会話をする二人にその怪しい男が声をまたかけてくる  
「肌を見る限り人間でなさそうだな。そつちの男も変な感じだ」

空気が変わる

まさかこの男：自分と同類か？

だが指摘するのなら真一一人でいいはずだ、どうしてアラタも…：  
とりあえずのらりくらりと交わすべくここはとぼけることにする  
「…さあ、なんのことですかね」

「とぼけても無駄だ。——悪いが消えてもらうつ！」

次の瞬間、その男は体の周りにオーラのようなものを発し、真一に向かつて飛び掛かってきた

思わず真一はその場を飛び退き、反撃を加えようと試みて  
「ぜえいっ！」

その男の顔面にアラタの回し蹴りがさく裂していた

目の前で起きた光景を理解するのに少々時間がかかった

「ぐはあつ!？」

男はゴロゴロと地面を転がりゆつくりと立ち上がる

「…いきなり襲いかかってくんじゃねえよ。びつくりして思わず足が出ちまつた…つと、怪我ないか？」

「あ、ああ…悪いな」

真一は悟る

出会ったのはついさつきだがこの鏡称アラタという男：かなりの手練れだと

「…つく、だが今度は——外さんつ！」

再び怪しい男が加速してくる

今度は真一目掛けてだ

しかし次は対応した

飛び込んでくる怪しい男の顔目掛けて真一は出来る限りの力で渾身の拳を叩きこんだ

この一撃もクリーンヒットしましたもや男はぶつ飛んだ

それでもグラサンが割れないのはわざわざ喰らう寸前に横を向いているからなのか

「ぐう…！ 相手の力量を見誤ったか…！ …む！」

するとどこからかあと四人ほど同じ格好の怪しい男が現れて真一とアラタを取り囲む

いつ呼んだか、もしくは最初はからスタンバつてたのか、いずれにしてもちよつとピンチだ

「はあーはつはつは！ これで形勢逆転だな！ さすがのお前たちでもこの人数は——」

その言葉が最後まで続くことはなかつた

何故ならば

「やあっ！」

駆け付けた聰子により、全員一撃の下叩きのめされたのだ  
流石エージェント、と言つたところか、動きに全く無駄がなく華麗、  
と呼ぶにふさわしい動きだつた

「グ…！ おおおおっ！」

怪しい男たちはそんなうめき声をあげていきながらどういう事か徐々に身体が灰と化していった

「二人とも、怪我はありませんか？」

聰子は二人に駆け寄り、心配してくる

二人は特に怪我がないことを述べると聰子は安心した表情を浮かべ、そしてすぐに真剣な表情になる

「…あいつらが敵です。倒すべき敵。今あなたのように、人々は常に、狙われているんです。…表向きではケンカやオタク狩りとか言われてますけど、実態は違います」

聰子はそこで言葉を区切り

「そういった事件を未然に防ぐのが我々の、そしてあなたのこれから仕事なのです」

どうやら先ほど自分達を襲つてきた連中がカゲヤシ、と呼ばれるものたちなのだろう

しかし外見では判断できないほど、ていうかほとんど人間ではなか  
ろうか

だが先ほどの男はみただけで真一の異常を見抜いたし、アラタの事  
も感づいた

一日見ただけで分かるような訓練でも受けたのか

「またこんな事があつてはいけません。さあ、『彼女』の下に行きま  
しょう」

「彼女？」

「…誰ですかそれ」

聞いたことがない単語を耳にした

彼女、と聞くかぎり女性のようだが

「我々エージェントの間では、師匠と呼んでいます。カゲヤシ戦に有  
効な技を持つた達人です。…ただ、少々、人間性に難あり、というか  
…とにかく会えれば分ります」

思い切り話を逸らされた気がするがこの際気にしないことにする  
「さあ、行きましょう」

◇

御堂聰子に連れられてやつてきたのはビルの屋上だつた  
結構広めで大き目なヘリポートもありさらには喫煙スペースまで  
ある

至れり尽くせりな場所だ

そして何よりも目を引くのがその大きめなピンク色な建物

そのあまりにもどう表現していいものか分からぬが、大人な建物  
である

…ていうかなんで屋上にそんないかがわしい建物が建つているの  
が甚だ疑問だ

「お、お久しぶりです。師匠」

そんな建物の二階部分に何やらゆらゆら揺れてる人影がいる  
一瞬くねくねの亞種かなんかと思つたが全然違つた

よく見るとそれは人影だ、しかも女性の

「…そうね、お久しぶり。こここの所見なかつたから…心配したわ。調

子はどう？ ん？」

「は、はい。師匠から教わった技を活用し、日々職務に励んでいます」「仕事とかどうでもいいの。：私が聞いてるのは、『あつち』の方よ」うん

あのくねくねしてゐる女性はきっとやばい  
何がやばいかは分かんないけどとにかくヤバい

「え、そ、それは…」

聰子も若干頬を染めている

…なんで染めたんだ

「フフ…相変わらずね。変わらない…かわいい」

来てさつそくなんだが帰りたい気分である

しかしそんな事を口にするわけでもなく、二人はどこか苦い顔して黙つて聞く

「そ、それで、今日は…」の、お一人を…」

「ええ、連絡を受けてるわ。素質があるかは分かんないけど、やつてあげる」

「あ、ありがとうございます！ …ほら、貴方たちも」

なんかお母さんみたいになつてるぞ聰子さん

それもなんかこつち側に非があるような、そんなお母さん

「別にいいわよお。ハジメテなんだしねえ…ねえ、君たち」

先ほどから若干置いてけぼりをくらつてる一人に対して師匠とやらは問い合わせてきた

「貴方たち、『チエリー』は好き？ 私はね、大好きなの」

何を言つてるんだろうかこのお人

「えつと…、あの」

「どういうことでせうか」

さくらんぼの事だろうか

とりあえず口に含んでレロレロしたことはあるのだが

「フフ…馬鹿な子は好きよ。反応が素直で、楽しいから。ええ、気に入つた」

キラリとではある

しかし確実に窓越しから殺意とはまた違った眼光が発せられた  
一瞬ゾクリとしたがすぐに落ち着かせる

「…まあそれは、またの機会にしましよう。二人とも、そこの闘技場に入りなさい。そして聰子は…こっちに来なさい」

このヘリポート闘技場も兼ねていたのか

高性能だな最近のビルの屋上は

「…へ？」

「気分が上がつちやつたの。さあ来なさい」

「え、ツで、でも、ここは真一さんやアラタくんがいますし…」

「来ないなら教えない。いいえ、もうナイロとも協力しない。誰にも

私の技は教えないわ」

「そ、それは！ 困ります…」

「欲しいんでしょう？ …私の…<sup>テク</sup>技が」

変なルビ振らないでくれませんかね

「はい…」

「はつきり言いなさい」

「欲しいです…！ 師匠の…<sup>テク</sup>技が」

…

なんだよこの展開

大丈夫なのかナイロ

ていうかアラタが来なくともそのうち勝手に滅んでいくんじやないのか

真一の隣で深くアラタはため息をついた

◇

改めて

聰子が建物内に入つていくのを見届けると師匠は再び口を開いた

「さて一人とも。私があなたたちに伝えるのは一つ——それは脱

衣

脱衣

読んで字のことく、それは服を脱ぐことだ

「別に自分が脱ぐわけではないわよ？ 脱ぐ、ではなく、脱がすのよ」

「…脱がす？」

「そう。脱がす」

真一の問いに師匠は変わらずくねくねしながら答えていく  
「カゲヤシ…だつけ。私はよくわからないけど…そいつらは太陽光が  
ダメみたいね？だから…私が持つ脱衣テクが役に立つ…らしいわ」  
なるほど

確かにそれなら変に近隣に被害が及ぶこともないし、それで済むな  
らばてつとり早い

「まあでも？」聰子が言うには普通に殴つてけばそのうち再生が追いつかなくなるつて話みたいだけど。この辺にも一応、頭に入れておきなさい」

万が一うまく脱衣テクが覚えれない時の救済処置なのだろうか  
しかしこつちの方がアラタとしては分かり易い

「いいかしら？ 重要なのは…相手を脱がしたいと思う衝動…。相手の肌を、露わにしてやろうと言ふ欲情…技術云々でなくそれが一番重要よ？ それがあなたたちにはあるかしら？」

返答に困る

考えたことはないと言えば嘘ではないし、現に二人も男である  
少しでも思つたなら、多分心のどこかにあるのだろう  
多少考えて二人は頷いた

「…いいわ。それさえあるのならもう何も怖くない。それじゃ私の可愛いペツトを使って、実戦練習してみましよう」

◇

その後師匠の指導の下、真一は脱衣のテクニックをモノにしていく  
割と飲み込みが早かつたのか、もともとの身体能力が高かつたのか  
特に苦労することなく脱衣テクを学んでいく

一方アラタはそんな戦いを必要としてとはいなかつたのか、基本しか  
学ぶことはなかつた

それでも十分彼は真一の脱衣テクを見て、見よう見まねではあるが  
基本だけならアラタは完璧にマスターした

「いい？ 素早く、何が何でも。華麗に…。それを心がけなさい」

最後に師匠から受けた言葉とはそんな言葉だった  
そしてその数分後、出口から聰子が出てきた

なんでか衣服を乱れさせて

「…ど、どうしたんですか」

「大丈夫ですかい？」

二人は気遣う

しかしその言葉に対し聰子は大丈夫です、と言いながら乱れた衣服を整えつつ

「…この事は、他言無用です。自警団の人たちにも教えないでくださいね」

きっと教えたらしいことになりそうだ

とりあえず、絶対に教えない事を誓う

「と、とりあえず、私は少し休んでいきます。何かありましたらまた連絡します：では」

身体をふらつかせながら聰子は喫煙スペースのベンチに向かつて歩いて行く

一体あの建物の中で何があつたのか

：興味は、尽きません

そんなこんなで真一は脱衣テクニックをマスターした

しかしこれを実戦で使えるかどうかと聞かれると：微妙である

## #4 阿倍野優 前編

翌日

アジトに顔を出したらすでに聰子がそこにいた

昨日の疲れもすっかり癒えて、そこにはごく普通な様子の聰子がいた

「先日の訓練、お疲れ様でした。これであなたたちも、私たちと同じくカゲヤシの奴らを倒すすべを手に入れました。今日は貴方に、実戦をしていただきます」

そう言つて聰子は真一に向かつてスマートフォンのような機械を手渡した

「これはカゲヤシ判別機。通称“ミラースナップ”と呼ばれるものです」

なんとこれにはそんな機能があるらしい

流石特殊な組織、装備も特殊だ

そんな似たようなものをアラタも受け取つており興味深そうにそれを見つめている

「我々の研究の成果が詰まつたものですから。大切にしてくださいね」

そう言われとりあえずそれをポケットに仕舞う

改めて真一は聰子からの言葉を待つた

「…では、これより命令を伝えます。貴方が実戦でも戦えるか…見極めさせていただきます」

アジト内に緊張感が走る

空気が変わつたと肌ではつきりと感じ取つた

「現在この裏通りで、カゲヤシがうろついているのを確認しました。」

：我々が自警団に協力するのを知つたとは思えませんが、念のため、先手を打ちます

つまり、今回の任務は自警団の警備と、自分のテスト、二つを兼ねたものになつてゐるのか

任務内容を簡単に纏めるならば…

この判別機を用いて、カゲヤシを殲滅せよ、と言つたところか  
「ここからは本当の戦いです。それを忘れないでください」

戦いはケンカで多少慣れているから戦闘は多分問題ないだろう  
しかし幹部（と言うかはわからないが）が相手となると分からぬ  
自分自身を鍛えるために、この戦いは気を引き締めなくては

「真一」

意を決して出ようとする真一にアラタは声をかけた

「気を付けてな」

「——ああ。わかってる」

気さくな笑みを浮かべて真一はアジトを出て、外へ出る  
じりじりと熱い太陽が裏通りを照らし、僅かばかりに汗が出る  
今日この日、真一の戦いが始まつたのだ



まず裏通りへと出て辺りを見回す

そう言えばこのミラースナップ、貰つたはいいが使い方を聞いてい  
ない

まあこれで写真を取るように使えばいいんだろうが、カゲヤシは写  
真に写るのだろうか

「…まあ使えば分かるか」

とりあえずミラースナップを起動させて適当に焦点を合わせる  
撮影対象はこの裏通りを行きかう何気ない人々

ピントを合わせて心の中でハイ、チーズだなどと言いながらかしゃ  
り、とシャッターを切つた

そして移つた写真を見てうん？と思つた

その写真には確かに人が写つていた

だが、何人か、確実にフレームに収めたのに映つていない人間がいたのだ

（なるほど…これがカゲヤシか）

存外、もつと派手な格好をしてると思っていたが実際は違つたよう  
だ

格好もすごい普通で、それでいてどこにでもいそうな人間だつた

真一はゆっくりとその人間へと近づいて声をかけた

「…お前、人間ではないな」

そう口にすると声をかけた人間の表情が変わる

素人ではつきり分かる、明確な殺氣だ

正体を知られた以上、向こうはこちらを消す氣でいるだろう  
無論、こつちもそいつを消す氣で挑んだのだが

相手からの先制攻撃が飛んでくる

何の変哲もないただのパンチだ

見切るほどでもなく身体を右に動かしてそれを回避し、距離を取る  
そしてその間合いを一気に詰めて腹部に拳を叩きこんだ  
うずくまるその男にさらに間合いを詰めてさらに顔を蹴り上げ隙を作

その一瞬の隙をつき——一気に相手が来ている服を脱衣させた  
肌に太陽の光が当たり、一気にその男が灰となっていく  
悶え、身をよじりながら男は口にした

「判別機…、だ、と…！」

それが男の最期の言葉だつた

言い終わると同時に、男は完全に灰になつた  
カゲヤシがどうなつて消えていくのかは聞いていた  
しかし実際に目の当たりにするところ…来るものがある  
…まだ二人、カゲヤシがいたハズだ

その二人を狩るべく、真一はまた歩き出した

◇◇◇

「それにしても、判別機だなんて、まるで漫画みたいだねえ」

そう言つて面白そうにその判別機に振れているのはヤタベである  
ちよつと興味を持ったのか今はアラタがもらつたミラースナップ  
をいろいろな角度から眺めて、そんな事を呟いた  
「いやあ…私が子供の時にはこういった便利グッズを作ろうと、躍起  
になつっていたものだよ」

そうほつこりしながらヤタベはアラタにミラースナップを返した  
確かにこんなドロ○もんのような道具には男子としては心惹かれ

るものがあるだろう

ちなみに他のメンバーと言えば

「そ、外にカゲヤシが…！ ど、どどつどうしようつ！」

ゴンちゃんはテンパつてるし

「ふーむ…やつぱりフォルムが良いよなあ」

ノブくんは『ITウイツチマリア』のフィギュアを眺めているし

「アラタさん、紅茶のおかわりはいかがですか？」

サラさんはいつも通りである

ちなみに御堂聰子は真一の力量を確かめるという名目でいつたん  
外に出ている

まあそのうち帰つてくるだろう

事前に渡された資料によると、服をひきはがし、その肌を太陽の自然光にさらすとどうやら灰となってしまうらしい

どういう原理かは分からないが、要は師匠から学んだストリップで相手の服を脱衣させて地肌を日光に晒さないと倒せないようだ

しかし別にうまく脱がすことが出来なくともダメージを相手の身体に蓄積していくば服を着っていても身体が再生に追いつかないらしい

正直そつちの方が分かり易い

「…すいません、紅茶ください」

「畏まりました、ご主人様」

…恥ずかしいっ！

なんだ、この感覚は

秋葉原に通う人たちはどうしてこんなこそばゆい感覚に耐えられるのか不思議で仕方ない

メイド喫茶…自分は足しげく通うのは難しそうだ、というか無理だそんな感じで悶々としていると聰子が戻ってきたどうやら彼女は僅かばかり微笑んでいる

予想以上に彼がやつてくれるところかつたのか

その数分遅れで真一が帰ってきた

僅かばかり、顔には疲れが見える

「無事、討伐できたようですね。お疲れ様です」

聰子はそう笑顔で応対する

「実は離れた場所であなたを見てましたが、お見事です。瀬嶋さんの見た通り、期待している以上の人です」

聰子が驚いている

それもそのはずである

少し前までは神学校に通うどこにでもいる普通の学生だったのだ  
この短期間での成長は目覚ましいものがあるのだろう

「これで、安心して命令を言い渡すことが出来ます。…今、私たちが狙つてるのは、阿倍野優です」

阿倍野優――

真一の友人を襲撃し、そして真一自身も怪我させた、いわば仇敵「そのカゲヤシを探し出し…倒します。奴は数多くの仲間を倒した強敵です。…正直瀬嶋さんの判断と言えどいきなりこれに当たらせるのは酷だと思つてたんですが…先ほどの戦いぶりを見て大丈夫と思いました。彼の眼に狂いはありません」

そんな会話をアラタはサラから注いでもらつた紅茶を飲みながら聞いていた

聰子の話を聞いているとどうも彼女は瀬嶋の事を強く信頼しているらしい

別にそれは不思議な事ではないが、相手があの怪しいおっさんだとするとどうもそれが不思議でならない

「奴をあぶりだすため、真一さんとアラタ三には、それぞれ駅前と、中央通り南北の二つの地域を担当していただきます」

そう言つて聰子は悔い、と眼鏡を上げながら

「今回の任務は私たちとの共同ですが、我々は別行動を取りますので、援護は期待しないでください。と、言つても今回はアラタさんもいますから、言うほどでもないんですけど…。ちなみにその二点は、我々が確認した最後の場所です。しつかり準備をいてから挑んでください」

どうやら本格的に戦いが始まるようだ

先ほどの戦いはあくまで真一の力量を図るためのもの

真一の額に、つう、と冷や汗が伝った

「それでは、よろしくお願ひします」



阿倍野優

彼はこの秋葉原内での活動において極めて好戦的なカゲヤシの一体のようだ

なんでもカゲヤシ内ですら危険視されているとかいないとか

そんな好戦的な一方で意外にも慎重に行動しているらしく、彼は人を捉え側近を利用し安全を確保したうえで吸血するとようだ

今まで何度も倒そうと試みているものの、その都度側近会を犠牲にし自分だけは生き延びているらしく手を焼いているらしい

今回真一とアラタに言い渡された任務はその阿倍野優の側近を退治すること

ナイロの見立てによればそうやつて少しづつ側近を倒していくば

阿倍野優も何らかの行動を起こすハズ…とのことだ

「じやあ駅前には俺が行こうか」

「わかった。じやあ俺は中央通りの南西な」

真一は中央通り、アラタは駅前とすんなりと役割が決まった

どうでもいいがその側近たちはバンドマンの恰好を好んでしているらしく見つける分には探しやすいだろう

「そいじや、健闘を祈るぜ真一」

「ああ、お前もなアラタ」

お互に手を叩いてそれぞれの場所へと赴く

出会つてあんまり経つていないが割とこの関係は悪くないかな、と思う真一だった



駅前にて

紅葉ワタルは秋葉原の町並みを見て驚嘆していた

傍らにはキバットと呼ばれるコウモリがパタパタ飛んでおり、ワタルの周囲を回りながら口を開いた

「最近の街並みつてすっげえな。見移りしちまうぜ」

「そうだね、キバット。：意外にキバットの事もスルーしてるし」

秋葉原の人たち心寛容すぎだろ本当に

まあそれはそれとしてワタルがこの秋葉原に来たのには理由がある

彼は普段バイオリン等を取り扱つてる楽器屋を学園都市で営んで

いる

しかし時たま外に出て気に入つたバイオリンを購入しそれを自分で

好みにカスタマイズする趣味があるので

今回はそんなバイオリンを探しに秋葉原にやつてきたのだ

「しつかし大丈夫かあ？ なんだか最近の秋葉原つて物騒つて言う

じやんか」

「そうだね。なんだか吸血鬼とかなんとかが現れて人を襲うとか」

甚だ嘘くさい話である

とはいえばつきり嘘とも言い切れないのがこの秋葉原の魅力なの

かもしけれない

「まあでも多分大丈夫だよ。何とかなるつて」

「…つたく。お前は楽天家だなあ、いつもの事だけどよ」

そんな会話をコウモリと紅葉ワタルは繰り広げながら秋葉原の街

を練り歩く

他の人々はそれをなんかの撮影かと勘違いしたのかそれに對して疑問を抱くことなかつたそくな

## #4 阿倍野優 後編

駅前に行くと雑多な人影が目に入ってきた  
献血の協力を要請している献血ボーグとか、カレーパンを配つてい  
る売り子の女の子など、様々だ

一瞬、ゲームセンターの中に入りたい衝動に駆られるが、自分の仕  
事を思い出す

いかんいかん、ここには阿倍野優の側近を探し出し、退治するため  
にきたのだ

周囲を見渡してそれっぽい人影を探す

適当に見渡していると、一人の女性に声をかけられる

「個展やつてまーす」

そう言つてその女性はなんかのチラシをアラタに向かつて手渡し  
た

別に断る理由もないアラタは特に気にせずそれを受け取つて、すぐ  
に後悔した

「無料ですから、ぜひお立ちよださーい」

「え？ でも俺は——」

「さあ！ さあ！ こちらですっ！」

⋮⋮

どうしてこうなつた

今現在、ビラ配りのお姉さんに拘束され、近くの画廊店へと連行さ  
れた

「画廊へようこそ」

なんて声をかけられたがそつちから引っ張つておきながらそれは  
ねえよ、と心の中で突つ込む

完璧なビジネスマイルというのが丸わかりだ

「お時間はありますか？」

「いえ、無いんで早く帰りたいんですけど」

「大丈夫です。それほどお時間は頂きません」

もうここに連れてこられた時点でお時間取られてるんですけど

「とりあえず、ホント帰つていいですか？」

「ちよ、ちよつと待つてください！」

先ほどからホントこれの繰り返しだ

この人も無駄に粘る

「その、こ趣味とかなにがあるんですか？」

絵と趣味つて関係なくね？

「そうですね。…特に」

「それならばぜひどうでしよう？ 絵の収集を趣味にしては  
お金かかるので結構です

「そんな訳で帰りますよ」

「ちよつと、もう少し私の話を聞いてください！」

…秋葉原つて別の意味で怖い

はつきり言えばしつこい  
「高貴な絵を買つて眺めると毎日を頑張ろうつて気になりませんか  
？」

「友達の笑顔見るだけで頑張ろうつて思えるんで大丈夫です」

これは偽らざる本心だ

「そ、そうですか。でも逆に高貴な絵を買つたことで買つた金額分頑  
張ろうつて気になりませんか？」

「買う気ないんで思いません」

先ほどから本当に話が平行線たどつている気がする

「そ、そんなこと言わずに！ どうですか絵を買ってみては」

…イライラしてきた

もはや言葉を言わずアラタは無言で画廊を出ようとする  
しかしさせまいとアラタの肩を掴んできた

「うちの絵は、将来必ず価値は上がります！」

「だつたら他の人に売つてくださいよ」

「いえいえ、そうしたい所なんですけど本日はせつかくお会いできただ

お客様だからこそおすすめしたいんですよ」

ああ言えばこう言う、とはこの事かとアラタは思う

今度こそ、帰ろうと出口へ歩こうとすると、掴んだ力が強くなる

「そんなこと言わずに。最近若い人の間では絵を飾るのが流行つてるんですよ？」

「聞いたことないですよそんな流行」

「それはお客様の周りだけですって！ もつと広い視野で世間を見てくださいっ！」

「なんでこんな事言われなきやならないのだろうか

いい加減本気で鬱陶しくなってきたアラタはやや強引に画廊から出ようと全力ダッシュした

後ろでなんか言つてる気がしたが、振り向くことはしなかつた

◇

「はあ…はあ…」

しばらく全速力で走つてアラタは息を整える

そして同時に思う

秋葉原こわつ、と

恐らく今後ああいう絵を売る人には話しかけないと誓う、ついでに画廊付近にも近寄らない

ふう、と一息をついて改めてアラタは駅前の人垣を見渡した

：そこでなんとなく、バンドマンの恰好をした変な三人組が気になつた  
アラタは聰子から受け取つた判別機『ミラースナップ』でその三人を撮つてみる

なんでも、カゲヤシは写真に写らないんだとか

「——ピンゴ」

バンドマンの恰好をしたその三人組はスナップには映らなかつた  
ターゲットを特定すると、アラタはその三人組に向かつて歩き出した——

◇◇◇

中央通り南北にて

須藤真一もアラタと同様に怪しいバンドマンの姿を発見した  
念のためにミラースナップで確認したがやはりあのバンドマンの

三人がカゲヤシで間違いはなさそうだ

意を決して真一はその三人に向かつて話をかける

「…うん？ なんだお前」

「アンタたち、人間じやないな」

空気が変わる

明らかにその三人の空気が、殺氣を帯びた

「…お前は何を言つてるんだ。なあ」

「ああ、まつたくだ…」

「ちよつと、俺たちが教育してやろう」

バツと、真一は構え、そのバンドマンの出方を伺つた  
しかし思いのほか、戦いはあつけなく終わつた

何故ならば、件のバンドマンの実力がそれほどなかつたからだ  
最も、カゲヤシの血を得た自分の身体能力が上がつたからなのか、  
それともその血を得たことによるものなのかは分からない  
それと同時に駅前に向かつたアラタの事が気にかかつた  
不安に思つた真一は携帯を取り出して彼のアドレスに電話をかけ  
る

スリーコールの後、繋がつた

「アラタか、そつちはどうだ？」

〈問題ない、皆倒した。そつちは？〉

声の調子から鑑みるにアラタの方も特に問題なく片付けたようだ  
しかし彼の声色はなんだか疲れてるように聞こえる

「いや、俺も問題なかつたけど…どうした？」

〈…いや、アキバの恐怖を知つただけさ〉

？ と首を傾げる真一だつた

◇

先ほど、御堂聰子から連絡としてメールが来た

内用は分かり易く、件の阿倍野優を見つけた、とのこと

しかし阿倍野優は自分が狙われていると悟られたのか接触を図る

前に逃げられたようだ

最近、阿倍野はとあるビル „UD+“ 近辺に出没しているらしく、

今回の逃走経路も同じなようだ

それで時間があつたらそちらに向かつてほしい、とのこと

聰子らも間に合えば駆け付けるらしい

幸いにも時間に余裕はあるにはあつたので、真っ直ぐにそのＵＤ＋に向かつている

ＵＤ＋に到着するとスーツを着込んだNIROのエージェントが見えた

「真一か」

エージェントに名を言われ、思わずどうもと会釈する

「阿倍野優は見つかったか？」

「いいえ、全く。そちらはどうです？」

「こちらも駄目だ。もしかして奴は我らの存在に気づいているのかもな」

そう言つてエージェントはふうむ、と腕を組んだ

そこでふと思いついたように真一に尋ねてきた

「そう言えば、アラタはどうした？」

「一応連絡したので、もう少しで――」

「真一」

噂をすれば影

声の方を向けばそこには先ほど話題に出た鏡袴アラタの姿が見え

た

彼はこちらが振り向いたのを確認すると駆け足になり、駆け寄つて

きた

「無事だつたみたいだな」

「お前も。ところで、阿倍野優を見てないか？」

「いんや全然。お手上げだ」

アラタの情報も頼りにしていたのか、エージェントはううむ、と肩を落としながら息を吐いた

そんな時、エージェントが思い出したように口を開いた  
「そう言えば、アイツの部下はバンドマンの恰好をしてたな」  
「…待てよ、となると…もしくは」

「…真一、お前、変装は得意か？」

「…は？」



エージェントたちの考えた案

それは奴の部下であるバンドマンに変装することだったのだ  
もしかしたら奴の部下の恰好であるバンドマンの恰好へすること  
で、阿倍野優の警戒心を和らげることが出来るかもしれない、言うの  
だ

…そして現在

「へえ、似合つてんぜ真一」

「変にからかわいでくれ、結構恥ずかしいんだ」

鏡祢アラタの眼前にはバンドマンの服を着こなしている須藤真一  
に姿があつた

首にヘッドホンをぶら下げ半袖に黒いベストを通しているその姿  
は中々様になつている

ちなみにアラタも勧められ、現在着込んでいるが実質動くのは真一  
だ

アラタはそれで歩き回りまだ部下がいると錯覚させる役割を貰つ  
た

「…」のヘッドホンいるか？」

「さあ、だがアイツの部下であつたカゲヤシはみんなつけてたし、あつ  
た方が怪しまれないと」

それもそうなのだが

いろいろ言いたいことはあるがそれをアラタに言つても仕方がないと  
判断した真一は再びUD+へと足を運んだ



「おお、見違えたぞ」

UD+に来てエージェントが発した言葉はそれだった

「馬子にも衣装、オタクにもカジュアル服、だな」

あれ、完全に馬鹿にされてね？ と一瞬イラツと来たがどうにかそ  
れを抑える

…アニメが好きなのは否定できないし

「これならば現れるかもしけん。我らはここを離れるが、頼んだぞ」

マジですか

実質ここにいるの新入りしかいないんですけど

おまけに戦闘経験ありそうなアラタもここを離れるわけではない  
が、少なくとも戦闘には参加できそうにないし、実質一人じやないか  
「…まあ、本気でヤバくなつたら手伝うぜ」

「ああ、頼んだ」

短いやり取りのあと、真一は阿倍野優を誘い出すべく、付近を歩き  
はじめる



しばらくして

(…本当に現れた)

周囲を警戒しながら歩いてると目の前に見知った銀髪の男が歩いてきた

それはかつて自分を再起不能に指せたロツカーフの男

阿倍野優だ

「…ち、人間め。オレが狙いか？ 確かに最近派手に暴れすぎた  
からなあ。…クソ、姉貴どもは俺にばつか命令しやがるし、瑠依も動  
かねえし。…ああ、イラつくなあ」

どうやら彼は不機嫌なようだ

にじみ出ている空気からも、それは分かる

やがて阿倍野優の視線は真一を捉えた

ばつちりと目が合う

「よう、お前か。どんな感じだ？ 味方がやられたんだろう？」

騙されてる!?

真つ先に頭の中に浮かんできた感情が疑念だ

正直に言つて速攻でバレるものかと思つていたのだが

「は、はい…」

若干目を逸らしながら肯定する

「聞いている。…たく、クソな話だ。…まさか仕留め損ねたガキにこ

ここまでやられるとはよ」

イライラを隠すことなく阿倍野優は舌を打つ

「やはりあの時に消しておけばよかつたんだ。くそつ……！ 瑞衣の血を得た人間が敵に回るとは……皮肉なもんだ」

その後で、場を支配したのは沈黙

沈黙を打ち破るように、口を開いたのは真一だつた

「——なあ、それは俺の事か」

「あ？ 何を言つて——」

そして阿倍野優は見た

ヘッドホンを外した、目の前の部下だと思つていた男の素顔を

「!? 貴様は!? しまつた、待ち伏せか!!」

そう判断するや否や、優は己の背に背負つていたギター “ナイトスティンガー” を構え、一直線に駆け抜けてきた

叩き潰そうと振りかぶるそのギターの一撃をギリギリの所で回避する

——読める！

あの時とは違う、一方的に殺されかけたあの時の路地裏のようにはいかない

今度は野球選手のように振りかぶり、優は顔面を碎くように振り抜いてきた

しかし今度は余裕をもつてしゃがんで回避し、そのまま優の腹部めがけて蹴りを撃ちこんだ

「ぐえつ!?

そんな言葉を漏らしながら大きく仰け反つた

軽く咳をしつつ、優は息を整えて再び真一を睨みつける

そして今度は一気に接近し、真一の足を目掛けてギターを振りかぶつた

その攻撃を軽くジャンプすることで回避し、真一は距離を取る僅かな隙間を縫うように右下からギターを切り上げる

その攻撃を両手で受け止め、一瞬ではあるが優の顔面が無防備とな

る

真一はその顔面を狙つて、自分の頭を突き出した  
早い話が、頭突きだ

「あぶつ!!」

今度は大きく仰け反つた

鼻のあたりを押さえながら睨んでくる眼光は未だ衰えない  
「——流石にアЙツの血を得ただけはあるな。道理でオレの部下  
じや勝てねえわけだ」

鼻を擦りながら優はニタリ、と笑みを浮かべる

「けど、オレはそう簡単にあやられねえぜ。さあ、ラウンド2と行こう  
じゃねえか！」

改めて優はナイトステインガーを真一に突きつけ、構えなおす  
望むところだ——心の中で思いながら真一も同様に構え直し——

「十分だ。ケリをつけるぞ」

どこからともなく、瀬島の声を聞いた  
すると阿倍野優の背後——そこに瀬島と御堂聰子の両名が立つ  
ている

間に合えば来る、とは言つていたが

「——ち、こいつは捨て駒か！」

捨て駒

はつきり言えば、使い捨てだ

——いや、薄々そんな予感はしていたのだが

確かに昨日今日で戦い方を覚えたど素人にこんな大役を任せるのはおかしいと思つたが  
「——なあ、昔はいろいろあつたが、今は同族。捨て駒同然の扱いを

受けて、お前それでいいのか

不意に語りかける阿倍野優の言葉

僅かではあるが、生まれるのは動搖だ

「後生だ、頼む。……今回だけ見逃してくれ」

何も答えない

違う、答えられないのだ

予想できていたとはいえ、こうもはつきり突きつけられた現実に  
その僅かな動搖が、隙を生む

「へへっ…バーカッ!!」

その隙について、優は真一にタツクルをぶちかました  
僅かではあるが視界を奪うとそのまま阿倍野優はどこかへと走り  
去つていつた

「しまった！」

「…貴様、化け物に情けなど。…正氣か」

聰子、瀬島の言葉

特に瀬島の言葉には自分を非難するようなニュアンスが含まれて  
いた

「——俺は囮だつたのか？」

なんとなく分かつてはいたが、とりあえずそう聞いてみる

「そうだ。技術を身に着けたとて、所詮お前は素人だ。想定以上には  
戦えたが…やはりダメだな。なれば、こういう使い方をするほうが最  
も効率が良くて、かつ、適切だ。…違うか」

——本当にはつきり言つてくれる

言いたいことをはつきり言つて歩き去る瀬島の背中を睨みつけな  
がらこちらを伺うように聰子が口を開いた

「騙すようなことをしてごめんなさい。しかし私たちは、遊びでやつ  
ているわけじゃない。貴方が一人で現れなければ、奴は一人で逃げて  
いたはず。残っているヤツの部下をアラタさんが攪乱してくれてい  
るとえど、合理的に倒すのならこれが一番…」

いくら言葉を並べられても正直それを真に受けることはない

ただ予想以上にはつきり言われると結構心をえぐられるという事  
実に今更ながらに知つただけで

「そ、それに貴方は予想以上に立派に戦えていたから…! 様子を見  
よう、という事になつて…援護が遅れてしましました…」

申し訳なさそうにしている聰子を見て、何となく真一は察する

恐らく、この御堂聰子という人物はそこまで悪い人ではなさそうだ  
「普通、カゲヤシの血を得ただけじやここまで急激な力の向上などな

「そ、それに貴方は予想以上に立派に戦えていたから…! 様子を見  
よう、という事になつて…援護が遅れてしましました…」

申し訳なさそうにしている聰子を見て、何となく真一は察する

恐らく、この御堂聰子という人物はそこまで悪い人ではなさそうだ  
「普通、カゲヤシの血を得ただけじやここまで急激な力の向上などな

くつて…きっと、それに瀬島さんも興味を持つて…！　いえ、もつと深い理由があつたはずで…！」

それにしても、ここまで女性を羨望させるとは、あの瀬島という男は何者だろうか

もつとも、瀬島に共感することはないと思うが

やがて彼女も言葉に詰まり、場には何とも言えない空気が流れていく

「…めんなさい」

聰子は一言、そう謝罪した

別段気にはしてなかつたが、こう真つ正面から謝れると逆に困るといふか

「と、ともかく、次の連絡があるまで、ゆっくり体を休めてください…」

そう言うと聰子は踵を返す

——聰子はちらりと首だけで真一を見て  
「…私が言うのもなんんですけど、あの人を恨まないでください。…ただ一生懸命なだけなんです、あの人は」

：一生懸命、なのだろうか

その所は分からぬが、とりあえず恨むことはないだろう

逆に、信頼することもないんだが

アラタに言われたこともある

そう簡単には信じることはできない

◇

あるビルの屋上

そこにいたのは鏡祢アラタだ

手すりに身体全体を預け、雲を眺めている

その後真一から聞いたのだが、結局阿倍野優を倒すことには失敗してしまつたらしい

そしてあまつさえ、真一を囮にし、弱つた所を狙う作戦だつたと知つたのはほんの最近の事

おまけに在ろうことかあのつさんははつきりと捨て駒だと言いたつたらしいのだ

もとから疑念しか抱いていないがどんどん疑念が膨らんでいく  
それでもまだ判断するのは早計だ、そう決めたアラタはもう一回青  
空を眺めた

「…はあ」

ふと、そんなため息を聞いた

アラタは視線を声の方に向ける

そこに座っていたのは青いカーディガンに白いスカートを着たク  
リームっぽい髪色をした女の子だつた  
パツと見はなんかこう、ゆるふわ…だろうか  
「…どうしたんです？」

不謹慎だとは思つたが、アラタは彼女に声をかけた

一方で声をかけられた彼女はビクンと身体を震わせたが彼に敵意  
がないと知ると、ポツリと呟きはじめる

「その…悩みがありまして」

「悩み？」

「はい。…その、流行の服装が分からなくって」

意外にも可愛らしい悩みだつた

「…けど、人もいる所も苦手で…」

これは困つた

出会つたばかりなので深いところは分からないが、恐らく彼女は人  
付き合いが苦手なのだろう

「…よかつたら、一緒に買いに行きません？」

「え？ で、ですけど…」

おずおずと言つた様子で彼女はカバンを抱きしめる

「大丈夫ですよ。この街の人たちはそんなに悪い人はいませんし。万  
が一絡まれたら、俺がキミを守りますから」

言つてアラタは笑顔を浮かべる

その女の子はしばし、彼の笑顔を眺めていたが、やがて釣られて  
笑つていた

どうしてだろうか

出会つてばかりなのに、妙に暖かい

「あ、名前言つてませんでしたね。俺は鏡祢アラタつて言います。以後お見知りおきを」

「私は——鈴。森泉鈴つて言います」

一人の人間と、一人のカゲヤシ

誰も知らない所で、二人は出会つた——

## #5 黒髪の少女

その人に連れられて、秋葉原をいろいろと回つた  
また彼も秋葉原に来たのは日は浅いようなのだが、それでも仲の良い人たちに聞きながらも私を案内してくれた  
ただ一言で言うなれば、楽しかった

服のお店をガラス越しに眺めたり、買つてもらつた飲み物と一緒に飲んだり：

人間がやつていそうな、そんな当たり前の出来事を体験して、心からそう思った

やがて入つた一つの服のお店にて、彼はある服を持つてきて私にいった

「…こんな学生服なんていいんじゃないですか？」

私に持つてきてくれたのはどこにでも売つていそうな学生服だつた

紺色のセーテーにありふれたそのスカートを、私は一目で気に入つた

「は、はい。その…なんだか、私でも馴染めそうな服です…」

「そう？ よかつた、じゃあさつそく清算を——」

「あ、ま、待つてください」

レジに行こうとする彼を私は呼びかけて止める

やつぱり彼一人に支払いをさせるのはなんか気が引けたから

「？ どうしたんです」

「わ、私もお金…出します…」

◇

大丈夫、という彼を何とか説得して割り勘という形で落ち着いてもらつた

着るのはまた今度でいいかな…なんて思つていると彼の携帯が鳴る

る

メールが届いたようだつた  
「ちょっと、ごめん」

彼はそう断ると携帯を開き届いた文面を見た

少しして彼は携帯を閉じて私を見ると

「ごめんなさい、急用が出来ちゃいました」

そう言つて申し訳なさそうな顔をする

「そんな、用事なら仕方ないですよ。誰にだつて都合つていうのありますし……」

「本当に申し訳ない。…つと、じゃあ俺はこれで――」

「す、すいません。さ、最後に――」

走り去ろうとする彼の背中を呼び止めて、少女は勇気を振り絞る

「？ なんでしょう？」

「けつ…！ 携帯の…番号…交換しませんか？」



須藤真一は人がごつた返すその道を早歩きで歩いていた

その理由は先ほどサラから送られてきたメールによるものだ

なんでも中央通りのとあるショッピングの前で暴動が発生したらしい

のだ  
自警団としてもこれは見過ごせないとして招集命令がかかつたの

だ

そして集合場所である中央通りの南西に到着する

すでにそこにはあらかたのメンバーが集まっていた

そして同様に：暴動の騒ぎもよく見える

「…まずいよ、どんどん騒ぎが大きくなってる、警察やマスコミが来るのも時間の問題かも知れないよ」

「そ、そうなると、また世間から叩かれちゃうね…この街や、僕らも」  
暴動を見て不安げな声を上げるヤタベさんとゴンちゃん

「もうネットのニュースでは騒ぎになつてているようですよ」

隣では携帯端末を弄りながらサラさんがそう報告する

真一とアラタはサラの隣に行き、その端末を覗き見て、うわあ、と若干引いた

完全なるありもしない言葉の羅列や心無い言葉に少し引く  
少し落ち着いて真一はヤタベさんに聞いてみた

「なんでも、あるアニメのグッズの限定版がこのお店の倉庫にあるつて噂がどこからか広まつたみたいでね？ プレミア価格になつたら販売する魂胆なんだろうつて、皆は言つてゐるんだけど…」

アニメグッズ、という事はノブくんが詳しいはずなのだが

そう思い立つたアラタはそうヤタベさんに聞いてみる、しかし…：

「そのはずなんだけど、さつきから連絡がつかなくつて…。ちなみにそのグッズなんだけど、お店が発注数を間違えて、予約した人全員に届かなかつたみたいなんだ」

「えつと…それはつまり、ここにいる人たちはみんな、予約した人たちつて事ですか」

「た、確かにそれは怒るよね…」

アラタとゴンちゃんは口々に呟く

真一は暴動に目をやつて顎に手を当てながら口にした

「…あれ、でもこの問題つてもう二週間くらい前の話じゃないです。なんだつて今更」

そう、そんな問題をほんの二週間も前に聞いた気がする

別段、真一は特にグッズには興味ない人種なので特に氣にも留めなかつたのだが（ノブくんは騒いでかな、と思いつ出）

「そうなんだよ。そんな根も葉もない噂が広まつたんだか…」

ヤタベさんは頭を搔きながらその暴動をまた見た

そんなヤタベさんに向かつてサラは聞く

「在庫は本当にはないんですか？」

「それは間違いないよ。店長は知り合いでから聞いてみたけど、本當にないんだつて。…けど、それを言つても誰も信じてもらえないだろうし：非はお店側にあるからあんまり強くも言えないし…本当に困つたよ」

元來、人間というものは人から聞かされた情報よりも、自分自身で得た情報を信じやすい傾向にある

やはり自分で調べ、決定づけるものの方が信じやすいのだ

そんな思案を余所に暴動の声の大きくなつてくる

——良いから出せよ！　“ITウイツチまりあ” の抱き枕＆

おっぱいマウスピード限定セットをよお！

—— そうだそうだつ!!

—— オークションに俺たちの分を出して儲けようなんて絶対させねえぞ！

—— そうだそだつ!!

—— 地下倉庫にあるんだろ！ ないつてんなら見せてみろお！

—— そうだそだつ!!

騒ぎ立てている理由としては大変くだらないものではあるが、彼らの熱意は本物だ

それだけ彼らは、その作品に命を懸けている

しかし時にその熱意は、人を傷つける暴力にもなってしまうのだ  
そう、今まさに目の前で起きている暴動のように

「——これはマズイね、このままじや店を荒らされちゃうよ」

「そ、そうなつたらお店は駄目になつて、逮捕者もいっぱい出て…」

「そうなつたら…大事件だよ」

たかがアニメグッズと言えど、警察沙汰になつてしまつたらそれこそ笑い事ではなくなつてしまふ

そんな深刻な心配をしているゴンちゃんとヤタベさんを余所に、アラタはその暴動を静かに見ていた  
正確には、ある一人—— 煽つっている人物だ

「—— なあ、あの暴動を煽つている人…なんか浮いてないか」「アラタさんもお気つきになられましたか？」

サラの言葉にアラタは頷きながら

「ええ、その…それに便乗している人たちはこの街でもよく見る服装なんだけど…その周りを煽つてる人は佐、その…なんだ、オタクつて雰囲気じやないんだよ」

そのアラタの言葉に真一はもう一度目を凝らしてその集団を見た  
その中に確かに一人：明らかに恰好がバンドマンティリストで周りから浮いている人が一人いる

「…ヤタベさん、あのエージェントの肩から貰つた機械は？」

「え？ でもこれは——」

「もしかしたら、です」

「うん、そうだね。それじゃ――」

サラさんに促されるままにヤタベさんはミラースナップを起動さ

その結果を見て、や

「…あれ、あれれ!?」

「え？」 いやいやあ……

ヤタベさんのその一

これはもしかして、解決できるのでは

「……」いつは、俺たちの出番だな

「そうみたいだな、アラタ」

真一は、シテの顔を見て、お下いに詰め合ひ

「そうこなくつちや！」  
念のため、あのお姉さんにも連絡を入れてお

۸۷

かくして、暴徒鎮圧が始まつた

□

その煽つて いる人物に近づいてみると、頭に痛いバンダナを巻いて  
いるだけで、後の服装はバンドマンと明らかにオタクではない  
アラタは暴走して いるオタクらを何とかし鎮めようとし、真一はそ  
の男に声をかける

どうするんだ」

「なんだ貴様は  
邪魔をするのか  
……なら  
排除しても問題ないな」

「一度と限定セットに並べられないようにしてやろう！」

その男は忍ばせてある木刀に手をかけて襲い掛かつてきた

…どこに木刀なんか携えていたのか、と疑問に思つてはいけない

•  
•  
•

しかし戦闘スタイルはただ力任せに木刀振うだけなので勝つのにはあまり苦ではなかつた

もつとはつきり言つてしまえば楽勝だつた

その男を倒したことにより徐々に周囲も静かになつていく

「ありがとう、真一くん、アラタくん。煽つているものがいなくなつたおかげでみんな冷静になつてくれたよ。しばらくすればあとは自然に散つてくれるだろう」

ヤタベさんはホッとしたように息を吐く

それにゴンちゃんも続くよう言葉を発した

「や、やつぱりこういう祭は、先導者がいないとね」

「お疲れ様です。よかつたらこの後、基地に戻つてお茶でもいかがですか？」

「そうですね、頂こうか、アラタ」

「だね」

そんな和やかなムードの中に空氣を壊すかのように一人の男の声が入る

「——あ、やつぱみんなじyan。皆もあのグッズを？」

——ノブくんである

ていうか、やつてきた方向は暴動が起きていた方から歩いてきたのだ

『…』

訪れる沈黙

やがてゴンちゃんが口を開いた

「も、もしかしてノブくんも今の群衆に？」

「もちろん。だって“ITウイッチまりあ”だよ？ あの神作品の限定グッズとありや当然ファンとしては行かざるを得ないでしょ？ しかも俺だつて当時この店で予約して死ぬほど悔しい思いをしたんだし。：てか誤発注で商品が入らないとかあつちやならないミスだよ、マジで」

ノブくんのトークは加速していく

「俺みたいに保存用、観賞用、使用用…みたいに複数店で予約してれば

まだいいけど、そうじやない人だつて大勢いたのにクオカード配つた  
だけどか信じられないクソ対応だつたし。こういつたことになるの

は当然の事だつたと、店が悪いよホントに。それにさ――――！」

「はいはいストップ。もう十分伝わつたから」

これ以上語らせると本当に長くなりそうでアラタがストップ  
させる

ていうか、通りで連絡がつかなかつた訳である

：ていうか保存用と観賞用はまだいいとして、使用用つてなんだ  
よ、という言葉を飲み込む

「あ、ところでみんなはなんでここに？」

「あ、それはね――」

ヤタベさんは今までの経緯を軽く説明する

――説明中――

「そんな…!?　じゃあ俺らは奴らに操られていたつてのか!?　馬鹿な  
！この胸の奥から突き動かされた衝動は、決して誰かに操られたもの  
ではなく―――あ」

唐突にノブくんは言葉を濁らした

「そう言われてみれば、前見かけた子が付近をうろついてたような…」  
「？　見かけた子？」

「うん。ほら、路地裏で真一が襲われていた時にいた子だよ。俺たち  
が駆け付けてきた時真一を抱えてたあの子」

真一の目の色が変わる

「彼女とその友達みたいのが、何か指示というか…そんなのを出し  
てた氣がする。確かに、そっちの方にいったかな」

そう言つてノブくんは真一たちが来た方向を指差した――

◇

「――あれ？　静かになつた」

先ほどの暴動を影から見守つていた女の子が二人いる

一人は文月瑠衣、そしてもう一人は森泉鈴という

「…という事は…」

「どうやら、うまくやつてくれたみたいね。混乱に乗じて吸血する担

当だった連中も、今頃撤退しているハズ」

「よ…よかつたあ…」

#### 彼女たちの目的

それははつきり言つてカゲヤシ側の作戦を邪魔することだ

今回の暴動にはその騒ぎに乗じて一般市民を吸血することが目的だつたわけなのだが、妨害は上手くいったようだ

「思つた以上の混乱になつて、少し焦つちゃつた…けど、何とかなつてよかつたあ…」

安堵する鈴に瑠衣は頷く

「そうだね、当初の予定通りに何とか事は運んでくれた」「だけど、これでよかつたんですか？」

不意に問われた鈴の疑問に瑠衣は「なにが？」とハテナを浮かべて聞き返す

「確かに、今回の計画で被害者は出ませんでしたが…瑠衣ちゃんの立場が…」

「いいの。私たちは言われたことをちゃんとやつたんだから。責任を負うのは、むしろ失敗するような作戦を計画したあの“一人”的の方”瑠衣が言うあの二人とは今の所二人の上司の立場にある姉妹の事だ

今回の作戦の立案者は彼女たちなのだが

「だと、いいんですけど…」

不安がる鈴の肩に瑠衣は手を置き笑顔を浮かべる

「大丈夫、もし責められても貴女には火の粉がかからないようにするから」

「…瑠衣ちゃん」

「それに、あの姉妹は私たちを管轄する立場にあるんだから、私たちのミスは彼女たちのミスでもある。つまり、どうあろうと大丈夫つてこと

と

そう笑顔で瑠衣は言う

鈴はその笑顔に連れられて自分自身も笑顔になり

「…うん」

と頷いた

「さ、帰ろう」

「はいっ」

瑠衣の言葉に鈴は元気よく頷いた

そしてふと、頭の中で思い浮かべる

（…そう言えばアラタさんみたいな人がいたような気がしたけど…気のせいだよね？）

そう自分に言い聞かせ前を歩く瑠衣の後ろをついていく

「でもやつぱりあの人たちの情熱はすごいよね。あそこまで大事になるなんて思わなかつたです。暴動を起こしてその最中に吸血対象を確保するのはいいとしても、その暴動の起こし方がただ噂を流すだけだなんて」

正直に言えばその計画を聞かされた当初は上手くいくはずがないとさえ思っていたのだ

瑠衣も彼女に同意する

「…そうだね。私もこんなに上手くいくなんて思つてなかつた。：秋葉原に住む人たちの想像以上の優れた行動力…。まさか平日、しかも昼間にあんなに大人数が集まつてくるなんて、流石に予想外だつたわ。…もし週末に実行されてたら、コントロールできなかつた」

瑠衣は軽く腕を組みながら思考を巡らせる

この秋葉原という街は想像以上にすごいのだ

「姉さんたちは私たちが考える以上にこの街に精通してる…」

「…」

二人がそうやつて考へているとき、ふと鈴が視線に気づいた

「——瑠衣ちゃん」

「え——？」

鈴に言われて瑠衣は振り向いた

そこにいたのは、いつかの路地裏で助けた人だつた

「…キミは…!？」

そう言いかけてマズイと判断したのか瑠衣は鈴の手を引いて一目散に逃走する

思わず真一はあつ、と言いかけるが、そのまま見送ってしまった  
あつちの方面は確か：公園があつたはずだ、たまにのんびりする場  
所、芳林公園が

◇◇◇

芳林公園

正直に言えばどこにでもある普通の公園なのだが、結構みんな立ち  
寄っているスポットだ

また、この公園を通る際に、先ほどと同じような騒ぎを別グループ  
が実行していた…していたのだが

「…いくら末端とはいえ、あんな簡単に退けるなんて…時間稼ぎにも  
ならない…」

その暴動をあえて通つて時間を稼ごうと思ったのだが、結果はコレ  
だ

「…あれが…私の血の力…」

良かれと思つて分け与えたのだが、かえつて逆効果になつてしまつ  
たのだろうか

瑠衣は俯きながら拳を握る

「あつ、もう…！」

ふと鈴が指差した場所を見る

公園の入り口には件の男が歩いてきたのだ  
意を決したように鈴は持つているバッグを持ち、身構えた

「瑠衣ちゃん、ここは私が食い止めるから逃げて！」「  
け、けど鈴じゃ——」

「早く！」

その剣幕に瑠衣は少したじろいだ

しばらく逡巡して

「…わかつた、無理はしないで」

そう呟いて瑠衣はその場を後にする

瑠衣の背中を確認せず、鈴はその男に向かつてバッグ“プシロフイ  
トン”を振りかぶった

◇

どうしてこうなつた

それが須藤真一の心に思つた言葉だ

ただ話をしたいだけなのに、なんで自分はこの女の子と戦つているのだろう

幸いにもその女の子の攻撃が読みやすいからか、こちらも攻撃は貰つてないし相手にも与えていない

やはり女性に手を上げるのは男として恥ずべきことだと思うのだ  
「やああああああ！」

ヘッドスライディングみたいに地面をすれすれにその少女はバッグを突き出し下段を狙つてくる

その攻撃を思い切りジャンプして背後に回る

（とはいっても…）のままじや平行線だ…！

意を決して真一は女の子の出方を見る

女の子は横からそのバッグを振るい、屈こうとしてくる  
真一はそのバッグを強引に掴みあげ、そのままの遠心力を利用してバッグを分捕つた

「きやあっ！」

地面を転がりながら女の子は倒れた

それでも女の子はこちらを見据える——が

「…やつぱり、妖主の血族じゃない私には…エージェントの相手には…！　うう、うう…」

目尻に涙を溜めている

…え？　これって

「ううえええええん…！」

とても大きな声で泣き出してしまつた

「…え？　つと…」

なんだろう、これ

自分が悪いのか、いやだけど…

完全にテンパつてしまふ真一

どうしよう、元から倒す気なんてなかつたのだが

あれこれうんうん唸つ正在と泣いてる女の子の後ろから人影が

飛び出してきた

それは、いつぞやの黒い髪の少女だった

女の子は突然の来訪に驚いて

「…瑠衣ちゃん!? なんで――」

「私だけ逃げるなんて、出来ない。…貴女を見捨てたら、私も“奴ら”と変わらない」

「そんな…! 私に構わず逃げて! 瑠衣ちゃんっ!」

「いいえ! 私は、貴女を助ける…!」

そう言つて少女は白い傘“白薔薇”を構え、真一に突きつける

「――行くよ!」

少女はその言葉と共に白薔薇を突き出した

いくら傘といえど先端なんか当たつたら本気で危ない

しかし相手を傷つけるわけにもいかず、思わず身体を後ろへとステップする

だが少女は攻撃の手を緩めない、これから繰り出されるであろう攻撃をするとなるとはつきり言つて身軽にならねば避けれれる自信がない

先ほど少女から分捕つたこのバッグ：想像以上に重いのだ

中になに入つてんだと突つ込みたいくらい重い

真一はそのバッグを出来るだけ女の子近辺に放り投げると少女の攻撃を避け続けた

しばらくその防戦一行が続き、お互に息が切れてきたころに、少女が口を開いた

「はあ…はあ…。なんで君は。あの時せつかく助けたのに。しばらく安静にしていれば私の血は消えて、キミの身体からなくなる、元に戻るはず。…なのに、なんどよりにもよつてエージェントになつて私たちを」

…いざそう言われるとなんて返せばいいのか、返答に困る  
少し考えて出した言葉は――

「…その、キミが…忘れられなくて」

何言つてんだ俺は、とすぐに後悔する

そして案の定少女の視線がキツイものへと変わる  
まるで養豚場の豚を見るような目だ

「…馬鹿な奴。あの時、私は君を助けたのに」

まあ案の定そんな言葉が返ってきた

しかし真一に言葉攻めで快感を得るなんて変態な趣味はない  
確かに私の眷族が君に怪我を負わせたのは事実だし、否定もする気  
もない。：いや、キミが私を恨むのも、最もなのかもしない。助け  
るためにとはいっても、キミに私の血を飲ませてしまつたのだから…、  
いずれ効果は消えるとしても、キミのカゲヤシ化は普通より長いと思  
う。得た力も協力だろうし…」

そこまで言つて少女は白薔薇を仕舞い、俯いた

その一撃動もまた、綺麗だつた

「…ごめん」

静かに、それでいてはつきりとそう呟く

静寂が場を支配して、なんだか妙な沈黙が流れる

…これは何かを言つて空気を変えなくてはいけない、そんな訳のわ  
からない使命感に真一は襲われた

「え。えつと…」

「…？」

「フア、ファーストキスだつたんだ…あれ」

何を言つてるんだろう、と傍から見れば思うだろう

しかし全力で考えてこれなのだから救いようがない

「…へ!? な、何をいきなり…!？」

ものすごく驚いた顔をした少女

しばらく呆然と立つて真一の顔を見ていたのだが、やがて口を開く  
「ま、待つて。それじゃ、何、忘れられないって…恨んでるんじやなく  
…その…そつちの事で…」

みるみる少女の顔は赤くなつてくる

意外にも少女の方もこういったことには疎かつた  
「ちょ、ちょっと待つて、あれはほとんど意識のなかつた君に血を飲ま  
せるためにやつたことで…キスとかでなく…、て、ていうかあれをキ

スというなら、私だつて、ファーストキスだつたんだから！その、だから…お相子で…」

二人して何を言つているんだろうか

女の子もすごくおろおろしている

恐らく最も訳が分からるのは女の子だろう

「…何言つてるんだろう、私」

心の中で同意する

それは真一も同じだつた

「あ、瑠衣ちゃん、向こうから人が！　あれは――エージェント！」

「！　逃げるよ」

女の子にそう指示し踵を返し走つて行く

しかし、少女の方は一度立ち止まりちらりと真一の方を見た

「…彼女は、森泉鈴、私は、文月瑠衣。…貴方は？」

そう、自分に名を聞いてきた

それに真一は答える

「真一。…須藤真一」

「…真一、か。うん、覚えておく」

そう言つて今度こそ鈴を追つて走つて行つた

それと入れ替わるように聰子とアラタ、そして秋葉原自警団の面々が公園に入つてくる

「真一さん、お怪我は!?」

「いいえ、問題ないです」

「よかつた…。遠くから見た限りでは、あの二人は文月瑠衣と、森泉鈴と思われます」

うん、知つてる

「あの二人は、阿倍野優ほどではないですが、厄介なカゲヤシの部類です。…けど、真一さんが無事でよかつた…」

その言葉には本当に自分を心配してくれるニュアンスがあつたしかしカゲヤシに対する敵意だけは全く持つて変わつていない話をしてみた限りでは、そこまで危険な部類とは思えないのだがむしろ話だつて通じるのだし…とも思つたが言つても無駄なので

心にしまつておく

「て、いけない、追跡しないと！」

思い出したよう聰子は瑠衣たちが走つて行つた方を見ながら足を動かす

そして不意に真一を見て

「言い忘れる所でしたが、カゲヤシ化してるとほいえ、貴方は人間です。生まれながらの化け物である彼らと対等な身体能力はありません。深追いは厳禁です、これからはすぐに連絡をしてください。では」

そう言つて再び聰子は小走りで追跡を始めた

タイミングを計り、ヤタベさんが口を開く

「無事だつたんだね。血相を変えて走つて行つたからビックリしたよ」

「ああ、まるで夏コミを思わせるダッショウをしてくれたからなあ」

ノブくんのたとえは分かり易いのか分かりにくいのか

「…その、気のせいかもせんが、お二人は何か、喋つていましたよね？」

サラさんの鋭い指摘に思わず冷や汗が流れる

言い淀んでいると、助け船が入つた

「まあいいじゃないですか。とりあえず真一は無事みたいなんだし」

アラタだ

「それに、結構綺麗な方だつたからな、あの人」

「う、うん。アキバ系アイドルって感じじやなかつたけど少しコスプレとかしたらすぐにつァンが付くよ。あ、でも今のアキバはダブプリの天下だから、難しいかなあ…」

どうでもいいが最近はRINと呼ばれるアイドルも活躍中であり、ダブプリに勝つてこそないが、劣らない人気なんだとか

「はは、真一くんがつて男の子なんだし、気になつちやうのかな。はは」

「え、ええ。まあ」

そんな言葉を濁しつつ、目線を逸らす

「うん、そう言えばキスしてたもんなん、路地裏で。分かる、分かるぞ。初体験つてそういうもんだよな。オレだつて初めてのエロゲで攻略したキャラがいまだに忘れらなくてなあ。オレの中学時代の一番の思い出さ」

そんなノブくんに小首を傾げながらサラさんは

「…中学時代？　そのときつてノブさん、未成年では」

「！　い、いや…その、相手は齡三百を超える合法口りというか？　オレはその時すでに成人してた的な感じであつて？　その…」

…ならアンタは一体何歳なのだというのか

ハハハ、とゴンちゃんが笑いそれに釣られてヤタベさんも微笑む  
「…ま、とにかくだ。真一、いつたん戻ろうぜ。サラさんのお茶でも飲みながら休憩しよう」

「そう…だな。…サラさん、お願ひできますか？」

アラタの言葉に同意しながら真一はサラに言う

サラは華麗な一礼をしつつ答える

「お任せください」

そう笑顔で答えた

最後に見せたサラさんの何かを思案するような表情を、真一が気づくことはなかつた

## #6 "シンデイ" を求めて

#6 "シンデイ" を求めて

鏡祢アラタの携帯が突然鳴った

彼がその携帯を取り出して画面を見てみるとメールが来たという報せが画面には表示されていた

画面を開いてみてみると、どうやら聰子から送られてきたメールのようだ

内容は要約するところだ

——次のターゲットは "JKV" と呼ばれるカゲヤシです。奴らは女子高生の格好をしながら男をたぶらかすといわれています。化け物の分際で異性を誘惑するなどと言語道断です。カゲヤシは幼少の成長は早いものの、十代半ばで老化がかなり遅くなり若い期間の姿で長い年月を生きることが確認されています。つまり見た目の年齢そのままでない、ということです。奴の制服という偽装を引きはがしてその真実を白日の下にさらしてやりましょう  
⋮サイヤ人みたいなものなのだろうか

メールにはまだ続きがある

——今回もアラタさんには真一さんのサポートに回つてもらいます。最も、もう真一さん一人でも大丈夫だと思つてはいるのですが、念のためという瀬島さんの指示です。念には念を、という言葉がありますので、どうか真一さんのお手伝いをお願いします。また、アラタさんに経験があるかわかりませんが女子高生の服というのは極めて特殊な装備のため脱がすのには特殊な技術が必要です。師匠にはすでにご連絡しておきましたので、彼女の元へ向かつてください、きつといいアドバイスを貰えるはずです

煽られているのだろうか

中々女子高生を脱がす経験なんてそうそうないと思うのだが  
しかしあの師匠に会いに行くのか

：個人的に苦手なのだけどあの師匠

そもそもアラタに脱衣の技など必要ないし…いや基礎は学んだけども

ともかく行くしかなさそうだ、既に真一も行つているかも知れないし

…たまにあの人獲物でも見るような目つきするんだよな…カーテン越しで見えないはずなのに

◆◆◆

似たような指令を受けて、須藤真一もまた、例の建物の屋上へと足を運んでいた

いつもの能面をつけてる下僕どのに話を通すと、またあのカーテンの向こうからくねくねと師匠が姿を現す

また、真一よりも少し遅れて、アラタも屋上へと姿を現した  
視線を交わし軽く挨拶をすると、改めて師匠のいる方向へと視線を向ける

師匠もそれを察したのか「ほん、と短くせき込んで

「あの子から話は聞いてるわ二人とも。女子高生の服を脱がすんですけどって？」

「は、はい。今度の相手が、女子高生の服を着ているみたいなので…それで、特殊な技術が必要だと聰子さんから…」

「ええ。女子高生の服…あれは思いのほか難易度が高いのよ。一見簡単そうに見えて、かなり複雑な構造をしている装備なのよ」  
装備つて認識でいいのだろうか

「乙女の柔肌を包み込む神秘のヴェール…それが普通の薄い生地な訳ないじゃない」

じゃあ自分たちが普段来ている衣服はいったいなんなんだ…

「実は様々な最先端技術を惜しみなく注がれた極めて特殊、かつ超高性能な衣服なの。普通のテクでは、おそらく無理ね」

女子高生とはなんなんだ

「…ところであなた達、女子高生は好きなの？ 本心から脱がしたい？」

物凄く答えづらい質問が投げられてきた  
何だろう、どう答えれば正解なんだこれ

まあ少なくとも嫌いではないし、むしろ好きな部類には入るのか?  
視線で軽くアラタと会話をしてみると彼もうーん、と考えるような  
素振りをしてうんうん、と頷きだす

どうやら彼も好きなようだ

「——ダメね」

しかし師匠から返ってきた言葉は思いのほかに痛烈な一言だつた  
「いい? 単純な性欲のみで脱がしたいだなんて单なる変態…いえ、  
犯罪行為よ。…何よその目は」

カーテン越しでこつちを見ているくせにこつちの視線の反応には  
敏感だなあ師匠

思いつきりこつちの男二人はジト目して師匠に視線を送っていた  
のに速攻で気づくとは

「私はいいのよ。いい? 私は相手を尊重し、相手を愛し、その者が秘  
めている何かを解き明かすことに命を懸けている。まあ場合によつ  
ては? その後にめくるめく肉の饗宴があつたりなかつたりするけ  
ど、それはどちらかといえばただの趣味よ」

同じじやねえか!

内心二人してそう思つたが決して心で叫ぶだけで声にしない  
色々と面倒そだだから

「ともかく。今ままのあなたたちではどんなテクを使つても女子高  
生の制服を脱がすなんてできないわ」

「…どうにかならないですか師匠。オレたちにはどうしても、その技  
術が必要なんです!」

「…いや別に俺は…(小声)」

「(しーっ!)」

思わず漏れたアラタの本音を真一は制する

ここで変にこじれると面倒くさいことになつてしまいそうだった  
のだ

「…仕方ないわねえ。あなた達にも女子高生の魅力を理解できる方法

を伝授してあげるわ」

「魅力を理解できる…？」

「ええ。この秋葉原のとある場所には某有名進学校制服を販売しているお店がある。もちろん正規品よ…もちろん、公には公表できないルートで売ってるみたいだけど」

◆  
大丈夫なのだろうか

「まあともかく、これはマニアの間でも高い評価を得ている服で、とっても素敵なの。その制服なら疎いあなた達でも女子高生というものの魅力を完璧に理解できるはず。それを手に入れて、誰かに着てもらつて鑑賞し、その魅力を理解しなさい」

◆  
難易度高い

「っていうか脱がす以前にそつちも十分な変態行為なのですがっ!? 「自分が来ても意味はないわ。やはり十代の若い女の子に着てもらう方が一番よ。その制服を取引する際のコードネームは—— “シンディイ”」

◆  
「し、シンディイ…?」

「そう、“シンディイ”よ。なんとしてでもシンディイを入れ、誰かに着てもらつて、鑑賞なさい。そしてその魅力を理解し、その柔肌を白日の下にさらけ出したい、という衝動に駆られたら…またここに来なさい」

◆

「…なあ真一、 “シンディイ” が何か知ってるか?？」

「全く。…アラタは?」

「俺も知らん。…ともかく、二人してシンディイとやらを探してみるとするか」

◆  
そんな短い会話をしても、一度そのまま屋上でアラタと真一は別れた某有名進学校…ともかく、一度ヤタベさんに相談してみるとしようもしかしたら何か情報を知ってるかもしない

◆  
「シンディイ?」

◆  
自警団のアジトにて

ヤタベさんにそのことを問い合わせてみると当然ながら困り顔をされてしまった

搔い摘んで説明するとアーノ納得したように首を上下に動かしながら

「制服だったのかあ。うーん…そういう商品を専門に扱っていた人なら知ってるんだけど、秋葉原電気街の開発と進化に飲まれてお店閉めちゃつたんだよね」

まさかの事実に真一はどうしたもんかと腕を組む  
確かにここ秋葉原では日々進化や開発が行われており、一節によれば五年も持てば老舗だ、とか言われてるくらいだ

しかしお店がないのならどうしようもない、ないものを嘆いて仕方ないのである

「…あ、そういうえば」

「？ 何かあるんです？」

「そういうえばこの前公園で見かけたよ。もしかしたらまだ細々と商売してるかもしれない」

「本当ですか!？」

「うん。もし見つからなかつたらまた相談において」  
闇の中に舞い降りた一筋の光

もしかしたら行けるかもしれない

アラタは今どうしているだろうか…とりあえずこの情報を共有しなければ

「…あれ」

と思つて携帯をかけてみたらどういうわけか電話中で繋がらない  
まあそれならまた後で電話をかければいいか、と真一は一度スマホをしまい公園へと足を運んだ



少しだけ時間は遡り、アラタの方

当然彼もシンディとかいう制服の知識はゼロであり、正直言つて開幕から手詰まりだった

っていうかなんだよシンディって

ゲームのキャラクターくらいしか聞き覚えないぞ

そして冷静に考えてみるとアラタは別段脱がしには拘つてないから最悪力圧してどうにかなってしまうんじゃないだろうか——と、冷静に考えてみると女子高生をひつぺがすという絵面自体ヤバい八方ふさがりだ

「……元春に電話でもしてみるか。なんかかわかないいけどアイツなら知つてそうだし」

知らないのならそれでいいし

正直あまり期待はせずにアラタは携帯を取り出すと土御門のアドレスを探して彼の番号に発信する

そのままスリーコール待つとがちやりと通話が？がつた

〈はいはーい、そつちから電話してくるなんて珍しいにやー。一体全體どうしたんだぜえい？〉

電話の向こうでグラサンをかけた金髪の男がニコニコしているのが想像できる

アラタはあー、と少しバツが悪そうに声を漏らしながら  
「なあ、いきなり変なこと聞くんだけどさ」

今？ 変なこと？

「ああ。元春、お前“シンディ”って知んないか？」

↑――!!

「ああ、いきなりこんなこと聞いて悪いな、知らんよなシンディが何なのかななんて――」

↑…かがみん、お前どこでそれを聞いた？

「…元春？」

なんだろう、土御門の口調が眞面目な時の口調になつているような

〈悪い、質問を変える… “シンディ”が何か知つているのか？〉

「あ、ああ。なんかどこの有名進学校の制服らしくてな。…その、ちよつとした諸事情でそれが必要なんだ。お前なら何か知つてそういうから聞いてみたんだが…」

↑――ふつふつふ。さつすがかがみんだぜえい。俺に相談するとは

英断だ

顔が見えていないはずなのにグラサンがキラーンと輝いていそ  
なのが想像できた

なんだろう、この口ぶりからしてみるともしかして土御門は知つて  
いるのか、"シンディ"を  
「しかしかがみん、そいつは一部のマニアが喉から手が出るレベルで  
欲しがる逸品だぜえい?」

「そ、そうなのか? …て、あれ?」

おかしい、電話しているはずなのに何か二重に声が聞こえる  
携帯に何かあつたんだろうか、と思つて画面を見てみると特に変化  
はないが

あ、っていうか真一から着信があつた

後で掛けなおさなくて

「だあがしかし? かがみんなお友達価格でシンディを販売してや  
るよ」

今度ははつきりと後ろの方から聞こえてきた

驚いて振り向くとそこにはぱちん、と携帯を閉じた土御門の姿が  
あつた

「も、元春!? お前なんでここにいんの!?

「いやー、たまたま買い物に来てただけですたい。そしたらかがみん  
から電話が来たからびっくりしたんだよ。まあそれはそうと… "シ  
ンディ" なんだろ?」

そう言つて彼はぐい、と手に持つていた紙袋を上に上げる  
その中に"シンディ"とやらが入つてゐるようだ

土御門はグラサンをキラーンと光らせて

「しかしかがみん、こいつはさつきも言つた通りマニアが本気で欲  
しがるプレミア物でな。一応お友達価格として多少まけるが、それ以  
上はまけらんないぜ?」

「…い、いくらなんだ」

「正規品は三万なんだが…かがみんになら二万七千円でご提供だ、こ  
れ以上は下げるんじゃないぜ」

制服上下一式で二万七千円

普通に制服と考えるとむしろ良心的な値段である

つていうかここを逃すともう手に入らない氣がするし、乗る以外選択肢はない

「——買つたつ！」

アラタはそのまま財布を開くと三枚の諭吉を取り出して、土御門に手渡す

まいどありー、といつもの軽い口調でそれを受け取つて彼はポケットにねじ込むと土御門はアラタに“シンディ”が入つた紙袋を手渡しながら

「いやー、しかしかがみんもそういうことに興味あるとはにやー。仲間が増えて俺も嬉しいぜよ」

「…仲間？ つていうかお前なんで秋葉原になんていんだよ」

「にやー、ここはさ、いろんなコスプレ衣装があるじやんか。…な？」

「な、て。…あーそうか、舞夏用だなお前」

そういうえば彼はシスコンだつた

土御門舞夏：義理の妹ではあるが、彼が非常に大切にしている妹である

そもそもつて既に手を出している模様

義妹だからギリギリセーフなのかもしけないが

「つていうか仲間つて」

「え？ てつきり仲良しのあの常盤台の女の子に着せるもんかと思つたんだがにやー？」

「誰が着せるか！ ともかく、ありがとう！ 後でお釣り寄越せよな！」

そう言つてアラタは袋を持ち直しながら踵を返して歩いていく

土御門はそんな彼の背中を見送りながら、グラサンを軽くかけなかつてるんだにやー」  
し  
「…頼んだぜえい、かがみん。アキバの未来は、お前とその仲間にかかるだつた

小さい声で激励を飛ばすと、土御門もまた反対方向へと歩いていく

## #7 JK\Vを撃破せよ

#7 JK\Vを撃破せよ

公園へと真一はやつてきた

最近だとここに逃げてきた鈴と瑠衣を追いかけて、そこで名前を教えたのが記憶に新しい

しかしヤタベさんは公園にいる、と言っていたのだが、どこにいるのだろう

しばらくきょろきょろとしていると、滑り台の近くで横になつて寝つ転がっているホームレスのような男性がいた

…この人だろうか

「…あの？」

とりあえず声を一つかけてみたが視線を僅かにこつちに動かすだけで何かを言おうという雰囲気じやない

「…すいません、”シンディ”って知ります？」

「…！」…なんですかそれ僕知りませんけど

今一瞬何かに驚いたような雰囲気があつた

つていうか反応からして多分知つているなこの人ヤタベさんの言つていた人か、あるいは近しい人物か

何回かアタックしてみよう

「…すいません”シンディ”、ご存知じゃないんですか？」

「知りませんって」

「いえでもその反応は」

「しつこいなキミ、知らないって」

「どんなに些細でもいいんです、”シンディ”について何か教えてもらえませんが？」

「…なんなんだキミ警察呼びますよ」

「どうか！ 僕には必要なんです！」

“シンディ”が！

傍から見たらどういう風に見えているだろう

「——ふー」

やがて大きく息を吐きながらホームレスの男性はゆっくりと立ち上がると

「“シンディ”なんてものは——知つてゐに決まつてゐだろおん！？」

こつちに向けてキレ始めた

「コードネーム“シンディ”！ 某有名進学校の制服を僕の流通（企業秘）でアナタにお届けするつ！ マニアが喉から手が出るほど欲しがるプレミア商品であるつ！ そんな商品を今でも扱つてゐのかつて！？ 答えはイエスだバカヤロオ！」

怒涛の勢いでめちゃくちやにまくし立ててくるホームレス

どうやら本人で間違ひはなさそだ

…やつぱりそういう服の売買がなんかで生計を立ててるのだろう

「君の“シンディ”に対するしつこさには将来性を感じます。三万で手を打ちましょう」

か

「——三万か」

財布の中身を空ける

いくらかかるかわからぬから多めにお金を持ってきていたのが功を奏したようだ

少し節約とかしないといけなくなるが——背に腹は代えられな

い

「買つた！」

「君なら払うと信じていました。これが例のブツです」

お金を受け取ると徐に茂みの中から梱包されたそれを渡される

これが“シンディ”：

そう言つたことに特に詳しくない真一でも、この制服が高級品だと直感で…心で理解できるツ

「そいつを狙うものは多い…ちゃんと家に帰つてから空けるんだよ」遠足かよ、と内心でツツコみつつ一礼をして真一はその場を後にする

る

服の入手はできた：問題は着せる人だ

御堂さん——は多分十代じゃないから。バス、サラさん：は引き受けくれそうだけど今後会う時気まずくなりそうなのでこれもバス…と、考えていると携帯がなつた

取り出して画面を見てみると、美咲の文字列——妹だ  
通話ボタンを押して耳に当ててみる

「もしもし？ お兄ちゃん？」

「うん、どうしたの突然」

「いきなりで悪いんだけどさ、部活で使うテープeling切らしちやつて  
さ。買ってきてほしいんだよね。お兄ちゃん今アキバでしょ？」  
「まあそれくらいならいいよ——あ、そうだ美咲」

唐突に閃いた

「どうしたの？」

「…いや、ちょっと頼みがあるんだよ俺からも」

「頼みい？ どんな？」

「いやほら、俺アキバで何でも屋紛いなことしてるの知つてるだろ？」  
「うん。お兄ちゃん戦う力中々あるからね。割と頑張ってるのは知つ  
てるけど」

「いやね、ちょっと着てほしいものがあるんだ…」

冷静に考へるととてもなくアホなことを言つて自覚は大きい  
にある

だが迷つてもいられないのも事実なのだ

◇

同時刻

鏡祢アラタは誰もいない教室の外で一人待つっていた  
待つっているのには理由がある

「…入つてもいいわよ」

教室の中から声が聞こえた

吹寄の声である

お許しが出たので教室の扉を開けてアラタは中へと入つていった

「…いきなり呼んでおいて、そしてこの制服を着てほしい、だなんて…  
お前そんな趣味があつたの？」

「いや、趣味つて訳じやあないんだけど。…まあ変な」と言つてる自  
覚はあるよ」

十代の女の子に着せて魅力を理解する

そんなことを馬鹿正直に言えるはずもなく、アラタは同級生である  
吹寄制理に協力を依頼した

めちゃくちや不審に思われたが、最後は折れてこうして協力してくれ  
ている彼女には感謝しかない

「…まあ、結構いい感じのは確かね。どこの有名進学校だかは知ら  
ないけど、悪くないんじやない？」

そう言つてくるりと回る吹寄

その拍子にふわりとスカートが舞い、一瞬ではあるが綺麗な円を形  
作る

くるつと回った際に彼女の胸元が軽く弾み、僅かではあるがその存  
在を強調する

…どこのドイツだ、女つ気が感じられないって言つてたやつは  
吹寄だつて普通に可愛い美少女じゃないか

「…どうしたの？ 急に黙り込んで」

「え？ ああいや、吹寄もやっぱり普通に可愛い女の子なんだなつて  
改めてばえるつ!?」

心からの賛辞なのだけど思いつきり顔面に近くのカバンを投げつけられた

その衝撃で仰向けに倒れてしまい体をぴくぴくとひくつかせる  
なんか失言でもしたのだろうか

ゆっくりとカバンを取りながら吹寄の方を見てみると顔を赤くし  
た状態で投げたポーズのまま大きく息をしていた

「はあ…はあ…ほんつと貴様はそうやって！ そういう所よ鏡祢アラ  
タ！」

「どういう所!？」

凄まじく理不尽なキレ方をされた

「と、とにかく。この制服は洗つて後で返すから！　他には何もないのよね！」

「え？　あ、ああ。ありがとう。助かったよ吹寄」

「何の助けになつたのかは想像つかないけど！　それじゃあね！　――ばか」

そのまま荷物を持ち直して吹寄は真つ直ぐ教室から出ていった。最後の方になんか言つていたような気がするが、よく聞こえなかつたためアラタは首を傾げる。

それはともかく、『女子高生の魅力』とやらは：多分マスターできたはず

ちょっと納得できない感じもするが、そう言うことにする  
つていうかそういうことにしないと先に進めない気がしてきた  
ひとまず再度秋葉原に戻つて真一と合流しよう

◇◇◇

電車に揺られて数十分、須藤真一も秋葉原に戻つてきていた。妹である美咲に例の制服を着てもらい、彼なりに女子高生の魅力を理解した真一はその後師匠の元へと報告に舞い戻り、師匠の用意した下僕を相手に軽くトレーニングをした後で、ここに戻つてきたのだ。何だろう、色々と失つた気がする

ちなみに服はそのまま美咲に上げた

自分が持つてるより妹が持つてた方が使い道あると思うだろうし

「真一」

声が聞こえてきた

ちらりとそちらを振り向くとアラタが手を挙げてこつちに歩いてきていた

真一もそれに応えながらアラタの方へと歩いていく

「お前も理解したみたいだな、魅力つてやつ」

「ああ。アラタも？　つていうかごめん、途中連絡を怠つて……」

「気にすんな。一応こつちもこつちで俺なりに魅力を理解してきたからな」

そう言つてアラタは小さく微笑んだ

「あ、一人ともこつちこつち」

そうしていると、こちらに向かって声を掛けてくる人が二人

ノブくんとゴンちゃんの二人だ

こちらが歩み寄っていくと、ノブくんが申し訳なさそうに

「早速だが悪い、見失つちまた」

「あー…。まあ駅前つて人通り激しい仕方ないよ」

「そう言つてくれると助かるぜ真一。けど、こつからまた探すのも

なあ…」

うーん、と首を捻つていると、「そうだ」とゴンちゃんが思い出した  
ように

「そういうえば、JKVの人たちつてお金持つてそうな人に声を掛け  
たよね」

「言われてみりやあそだな。びしつとスーツ決めてる人にはすぐえ  
かけてたな…」

「…スーツ、ねえ」

真一は腕を組んで考える

もしかしなくても援助交際的なアレなのだろう

最も、頂かれるのは血液で、欲に釣られた代償は引きこもり化だが  
「となると、金持つてそうな恰好すれば向こうから寄つてくる可能性  
がある、って訳か…」

アラタの言葉にその場の四人が押し黙る

そして真一以外の三人が一斉に真一の方に視線を向けてきた

「…？　え？」

なんでだろう、嫌な予感がしてきた

◇

「お、戻つてきた」

その辺のスーツ専門店で一番安いスーツを購入し改めてそれらを  
着用して真一は駅前に戻ってきた

案の定嫌な予感が当たつてしまつた：安いとはい二万はしたぞ

「決まつてんねえ。安物とは思えないぞ」

「う、うん。十分格好いいよ。これならJKVも来てくれるかも」

ノブくんとゴンちゃんが口々に感想を呟く

嬉しいつちやあ嬉しいんだが、なんだか複雑な気分である

「よし、そんじやあ真一はその辺を歩いててくれ。ノブくんとゴンちゃんは巻き込まれないように離れてて。俺は動きがあつたらすぐ駆け付けるよう少し離れた位置にいるよ」

「わかった」

アラタの言葉に頷いて、三人が散っていく

今この場にはポツンと真一のみが取り残された状態だ

さて、ふらつくといつてもどうするか、エウリアンに見つかりでもしたら面倒だから……とりあえず家電でも見に行こうかと考えて歩き出した——その刹那

「——ねえ、そこのおにーさん？」

どきり、と心臓が跳ね上がる

声を掛けられた、後ろからだ

ゆっくり振り返つてみるとそこには女子高生と思われる女の子がこつちを見つめている

「ちょっと私と遊ばない？——いっぱいサービスしてあげるよ？」

マジで援助交際じやねえか、と内心でツッコミを入れる

それでいて結構中々かわいい部類に入る

もしあの女の子——文月瑠衣と会つてなかつたら揺らいでいたかもしれない

とりあえず返答しなくては

「え、えっとお…そ、そうだね。してもらおうかな？」

「やつたつ。それじゃあ一緒に——」

そう言つて女の子は真一と腕を組もうとその手を伸ばしてきて——何かに気づいたように距離を取つた

「つ、この低品質な質感は——安物!! なによそれチョベリバー！」

古つ

女の子もそれを自覚していたのか言つた直後ハツとした様子で

「しまつた、これはもう死語だ！ 年齢がバレる！」

いずれにしてもターゲットが向こうから寄ってきたようだ

それを判断したのか、ゆっくりとアラタも真一の隣に歩いてきてJKVを視界に収める

「…しかしチヨベリバテ」

「うつさい！ …アンタたち、ナイロのエージェントね。…目立つところじやあやりたくないなかつたけど、仕方ないわ。年齢を知られた以上、生かしてはおけない」

そこかよ

「全裸にして駅前に放置してやる！ 社会的に殺されるがいいわ！」

そう言つてJKVリーダーが指を弾くと、どこからともなく同じ制服を着た女性が現れる

どうやら彼女の部下みたいだ

JKVリーダーはふふふ、と小さく笑つて

「女子高生の制服は、乙女の柔肌を包み込む、神秘のヴェール…たかがエージェントごときには脱がせられないわよ！」

「真一、取り巻きは任せろ、お前はリーダー格を！」

「わかつた！」

アラタの言葉に頷いて、真一は両の拳を身構える

他の四人の彼女の部下はアラタに任せて、自分はこのリーダー格を倒してしまおう

「さあ、なるはやで片付けてあげるわ！」

そこら辺は知つてるんだ

なんて心でツッコみながら、真一は相手の攻撃をいなしていく  
確かに彼女も十分魅力的である

だが今の真一は彼女以上に魅力的な女性を知つてしまつている  
彼女――瑠衣に比べればJKVなんて――まだまだだ

◇

連携は取れているが、そこそこ経験を積んだアラタの前では彼女たちは相手にはならなかつた

せつかくだから“師匠”に教わった脱衣の技も軽く試してみると

しよう

相手の攻撃をいなして、隙をかいくぐつて——針の穴のような突破口を貫く勢いで——その衣服を奪う！

「——おりやあ！」

びゅん、と風が駆け抜けた

アラタの手には先ほどJKV部下たちが着ていたであろう制服が上下二枚ずつ

——なんでこんな技覚えてしまったのだろう

カゲヤシとの戦闘以外で役立つことはあるのだろうか

「い、やあ……！　あつい……！」

「からだが、溶け——」

日光に晒されたJKVの部下たちはそのまま下着ごと全身を炭のよう灰化させて消滅していく

正直見ていて気持ちのいいものではない

……本当にこれで良かつたのだろうか

「はあああっ！」

それと同時に、リーダー格と戦っていた真一の方も戦いが終わつたようだ

部下たちと同じように衣服を脱がされ、その身を日光に晒されたJKVリーダーは身体を焼かれ、灰のように消えていく

「いやだ……！　しにたく…………ない……」

消えゆく最中、呟いたリーダー格の言葉が耳に入つてくる

それを聞いた真一が沈痛な面持ちで顔を俯かせていた

仕事だと割り切ればいいのだが、人間はそう易々とは割り切れないしかしこのまま暗い空気なのもいけない、と思つたアラタは真一に近寄つて

「お疲れ様。かつこよかつたぜ」

そう言葉をかけた

真一は言葉を聞くと小さく笑んで

「……ありがとう」

と短く呟く

多少はこれで落ち着いたかな、と判断したその時、離れた場所にいたノブくんとゴンちゃんの二人がこちらに向かつて駆け寄ってきていた

「お疲れ様二人とも。ちょっと見ててひやひやしたけど…怪我がなくてよかったですよ」

「うん。全くだ。まるで特撮の収録見てるみたいだつたぜ」

ノブくんの言葉に少しだけ真一は微笑んで返した

特撮の撮影もあんな感じなんだろうか

「あ、そうそう。無事に一人がJKVを倒したこと、御堂さんにメールで報告しといたよ」

「ありがとうゴンちゃん。御堂さんはなんて？」

「短期間でここまで実力をつけるなんてすごいって、二人のこと褒めてたよ」

「お？ それじゃあ昇級とかも近いのかな」

「…エージェントに昇級なんてあるの？」

ゴンちゃんに言われてノブくんはうーん、と短く考えた後で

「しらね」

そうあつけらかんと返すのだった

一瞬場はぽかんとなつたが、ゴンちゃんが小さく笑いだすのと、ノブくんが合わせて笑うのはほぼ同時

『あつはははつ』

何はともあれ、である

JKV 撃破完了

## #8 リベンジマッチ

しばらくは何もない、だから自由にしててくれ、という簡潔な内容のメールが来た

実際にはそのメールにも瀬島は君の腕を見込んで、だの何やら書かれていたがそこら辺までは詳しく読む気になれず、早々にメールの画面を消した

まあ早い話、しばらくは自由時間ということになる

既にアラタは秋葉原を歩き回っているようで、そこの自由時間を満喫しているようだ

何をしようか、と真一も歩きながら腕を組んで考える

そんな時、ピリリと真一の携帯が鳴り響く

携帯を取り画面を覗き来むと、情報屋という文字列

この情報屋、とはこの秋葉原にてさまざまな情報を取り扱っている男性だ

ひよんなことから彼と知り合いになつた真一は時たま彼から何でも屋の仕事を紹介してもらつたりしているのだ

それはそれとして、何の用事だろうか

新しい依頼でも来たのかな

「もしもし？」

〈お前か。新しい依頼だ〉

「わかつた、そつちに向かう――」

〈いや、そう複雑じやない、このまま話す。：話すんだが〉

「？ どうしたの？ 珍しく歯切れが悪いね」

〈…この依頼、どうも妙だ。用心しろ真一〉

何時になく真面目な声色でそう忠告する情報屋

その声色に、電話越しで真一は頷くのだつた

◇

依頼主は、文月瑠衣

件名はデートの所望

報酬は――愛

待ち合わせはジャンク通りにあるカフェ、のことだ  
くれぐれも用心しろよ、わかつたな

◇

怪しそう

なんだろう、あの子つてこういう風に誘つたりするのだろうか  
完全に偏見だが、あの子はなんかそういうことしなさそうな気がす  
る

しかし一体全体どういうことなんだろうと思ひながら歩いていく  
とやがてジャンク通りに到着する

ここ通りにはオープンカフェがあり、ヤタベさんがたまに通つて  
いるのをよく聞く

真一はあまりここジャンク通りに行く機会がないので来るのは  
実は初めてとなる

と、そんなことをしてゐ間に件のカフェにたどり着いた  
ベンチに座つてゐる姿は確かにあの文月瑠衣だつた

ただ彼女にしては珍しくフードを被つておりその表情が伺えない  
「…来たな」

「え？」

不意に瑠衣はそう言つて趣に立ち上がる  
フードに隠れたその顔は言葉を続ける

「おい、言つた通りだろ。こいつは瑠衣の事を捕まえる気だぜ」

何を言つてるんだ？

真一個人としては瑠衣を捕まえる気なんてサラサラないのに  
一人困惑していると今度は背後の方から声が聞こえてくる  
「なるほど」

それは右目に眼帯をしている男性だった

確か何度も見かけたことはある、このカフェテラスのマスターでは  
ないか？

もしかすると、この人もカゲヤシ…？

「最初は個人的な恨みから共闘を持ちかけられたかと思つたが、まさ  
か本当に狙われているとは…どこから漏れたのか…」

「ど、」でもいいじゃねえか。さあ、アイツの為にもここでぶちのめそ  
うぜ！」

そう言つて衣擦れの音が聞こえてきた  
なんだろうと思いつマスターから視線を外し瑠衣へと視線を戻して  
みると

阿倍野優がそこにいた

「——えええええ!?」

流石に声が出た

え、何なのコイツ、声も変わつてたよ!?  
つていうか背格好も変わつてたぞ！ カゲヤシつてそんなことも  
可能なの!?

「うははつ、いいリアクションじやん、女装までした甲斐があつたぜ」  
混乱している真一を他所にどんどん一人の会話は進んでいく  
「君は瑠衣に命を助けられたのに、その瑠衣を狙うとは…恥を知れ」  
「い、いやちよつとまつて——」

「瑠衣の為に消えてもらう。彼女の存在に感づかれた以上生かしては  
おけない。あの子の日常を守るために」

「行くぜエージェント！ この前の雪辱戦だ！」

マスターが拳を構え、阿倍野優が持つているギターを振りかぶり真  
一に襲いかかってくる

戦いに慣れてきたとはい、戦況は二対一、はつきり言つて不利な  
ことに変わりはない

「おらあ！」

ぶん、と振るわれるギターを両腕で何とかガードする

だがその隙にマスターが懐に飛び込んできて腹部目掛けて拳が叩  
き込まれた

ぐふ、と肺から息を吐き出しながらグルグルと地面を転がつていく  
阿倍野優もさることながら、このマスターもかなりの手練れだ  
「ははー、おらトドメだああ！」

そう言つて阿倍野優が真一にトドメを刺さんと持つてゐるナイトステインガーを振りかぶる

思わず両腕を使つてガードの構えを作つて目を開ざし衝撃を待つ  
：だがいつまで待つても衝撃は来なかつた  
ゆつくりと目を開けてみると見知つた人物が一人間に入つてそのギターを受け止めていた

「…アラタ！」

「ぐ、テメエ!!」

「よう。面白うことしてるじゃないか。俺も混ぜてくれよ！」

言つてアラタはそのギターを弾き飛ばすと阿倍野優の腹に肘での

一撃を叩き込む

「ぐお!？」

大きく嗚咽を上げながら阿倍野優は何とかギターを手放さなかつた

空いているもう片方の手で腹を押さえながらぎろりとアラタの方を睨みながら

「テメエ…！」

そんなことを言つてくる阿倍野優を視界に収めつつ、警戒しているマスターへと視線を移す

彼は身構えたままじつとこちらを見ており、体制が整うまで待つてくれているみたいだ

武人気質だな、とアラタは内心で笑みながら真一へと手を伸ばす

「大丈夫か」

「あ、ああ。アラタこそ、どうしてここに」

「情報屋のオツサンからもしもの為についてことで連絡貰つたんだ。んで、來たら危なそうだつたからね。間に合つてよかつた」

アラタに手を引つ張られ真一は再度立ち上がる

「さて、こつからはフェアに行こうじやないか、真一はあのロツカー、俺はあの男を抑える」

「わかつた」

互いに領き合うと真一は阿倍野優へ向かつて駆け出した

「は！ 上等だぜ、タイマンでも俺は負けねえ！」

へっと笑いながら阿倍野優がもう一度ギターを構えて駆け出してくる

さつきはマスターの存在もあつて一人の集中できなかつたが今はもうマスターはアラタが相手してくれている

阿倍野優一人だけなら——もう問題はない

振りかぶつてくるギターの一撃を片手で受け止めながらまず腹に

拳を叩き込み、もう一発今度は顔に叩き込む

仰け反つて後ずさりしている阿倍野優に対して、今度はキックで追撃を仕掛けた

ふらつきながらも阿倍野優は何とかギターでその一撃を受け止めてるが衝撃までは受けきることが出来ずズザザザ、と大きく後ろへと下げられた

「貫つた——！」

相手はカゲヤシ

アラタほどの体術は真一にはない

ならばとつと脱がした方が手つ取り早く片が付く

半ば強引に彼の懷に接近し、相手の服をひつつかむと力任せに勢いよく引つペがす

女性ならまだしも、コイツは男

慈悲などない

ビリイ！ と布が裂ける音と共に阿倍野優の上半身が日光の元に晒される

しかし相手は上級クラスのカゲヤシ、それでもまだ大したダメージにはなり得ないが

「ぐ、つは…!! こ、こいつあもうアイツの血を得たつてだけじやあねえな…腕を上げたつてことか。ち、次は負けねえ！」

そう短く捨て台詞を残すと阿倍野優はそのまま跳躍してどこかへと飛び去つてしまつた

「ぐう！」

同じタイミングで、アラタの掌底がマスターの身体にヒットして、

膝をつく

こつちも勝負あつたようだ

「…おい、仲間は行つちまつたぞ」

「ふ。初めから助けてくれるなどとは、思つていなさいさ」

形勢は逆転、相手の援軍の望みも今のところ薄い

ここで始末するべきか

「殺すがいい。瑠衣を守ることだけが私の生き甲斐であり使命でもあつた。それが為せなかつた以上、私に生きる価値はない…」何やら彼の中でトントン拍子に話が進んでいる気がする

つていうかアラタは途中から駆け付けた身であるためになんで戦闘になつたのかという状況がわからない

なにがどうなつてあんな戦闘が始まつたのか

「だが一つ聞かせてくれ。なぜ君があの子を狙うんだ…」

「…いや、別に狙つてるつて訳じやない。…あの子が狙われてるなんて話知らないし：正直今の状況だつてよくわかつてないんだよ」

「…なに？ それじゃあ君は何も知らずに…？」

それだけ聞くとマスターは一つ安堵のため息を漏らす

そんな時だつた

自分の背後から、一人の見知った男性が歩いてきていたことに気が付く

「おや、真一くんにアラタくん…おつと！ 戦闘中だつたかい…つて、あれ…!?」

やつてきたのはヤタベさんだつた

彼はアラタと真一、そしてマスターの立ち位置で状況を理解し、マスターの顔を認識した刹那驚きの声を上げた

ヤタベさんはマスターの近くへと近づいて

「マスター…！ まさかアンタ…！」

「ふ、流石はヤタベさんだ…エージェントとも関係し、我々についても知つているとは」

何やら状況がどんどん混乱してきた

一体何がどうなつてているのだ

とりあえず頭に疑問符を抱いたアラタがマスターに向かつて問いかける

「えつと…ヤタベさんとその人は、一体…？」

「私の行きつけの喫茶店のマスターだよ…。彼の淹れてくれるコーヒーは絶品なんだ…同じ将棋指しでね。互いに下手だが、だからこそいい勝負というかね…マスター、アンタはカゲヤシだつたのか」

ヤタベさんの言葉にマスターは息を整えながら、ゆっくりと頷いた  
「しかし、アンタは他人に危害を与えるような人間じやないだろう…？」

「…カゲヤシ皆が好戦的、かつ妖主の意向に従つているというわけじゃあないのさ」

今、マスターは気になる単語を呟いた

「…妖主…」

「どうやら、色々あるみたいだね」

真一の呟きにヤタベがそう短く返した

そしてヤタベはマスターの前に立つて真一とアラタに向かつて

「二人とも、頼みがあるんだ」

「…わかつてますよ、ヤタベさん。な、アラタ」

「ああ。この人を倒す意味があるとは思えないからね」

「！…君たち…！…ヤタベさんまで…」

マスターを倒す理由はない

確かに最初は誤解から攻撃を受けたが、マスターは阿倍野優ほどじやあなさそうだ

それに、話が通じないって訳でもない  
ならきっと大丈夫だ

「君たちだつて聞いただろ、多分カゲヤシにもいろんな人がいるんだよ。私は彼と付き合いが長いからわかる。彼はむやみに人を襲つたりなんかしない。この秋葉原でひつそりと喫茶店を営んでいるだけなんだ。危険人物なんかじやない」

「はい、わかっています。ここでのヤタベさんの反応で、十分理解できました」

「ヤタベさん…どうしてそこまで…」

「いいんだ。アンタとの将棋は今私が負け越しなんだ。このままじゃあアンタの勝ち逃げになっちゃうじゃないか。それに、アンタがいなくなつたら誰があの美味しいコーヒーを淹れてくれるんだい？」

「マスター…」

ヤタベさんの笑みを見たマスターは立ち上がり、改めて真一へと視線を向けた

「すまない、君の連絡先を教えてくれ」

「ああ。ついでに、俺の名前は須藤真一、よろしく」

「私は姉小路駿…だが、マスターで構わない。落ち着いたら君に連絡を送るよ」

マスターの言葉に真一は頷く

ともかく、これでひとまずは一件落着といったところだ

「ありがとうございます、真一くん、アラタくん。マスターを助けてくれて」

「気にしないでくださいよ。旅は道連れなんとやら、っていうじやないですか」

「ははは。そうだね。それじゃあ私は一旦離れるよ、マスターの手当とかもしないといけないからね」

そう言つてマスターと一緒にヤタベさんはこの場を離れていった  
二人の背中を見守りながら真一はアラタに向かつて口を開く  
「…カゲヤシにも、色々な人がいるって、言つてたな」

「ああ。少なくともあのマスターさんは、話が通じそうな人だ。…全員が全員、あの阿倍野優とかいうロツカーバつかじやないんだな」「…もしかしたら、人間とだつて共存出来たりするのかな」

「……それはわからねえ。…だけど、可能性は少ないけど…希望はあるのかも知れないな」

言葉が通じるのなら——瑠衣とも手を取り合えるのかもしれない

い

可能性は確かに低いけど、そんな僅かな希望に、真一は夢を見る——

## #9 コードネーム「エックス」

先日のマスターたちとのアレコレから数日

本日も情報屋からのお仕事やナイロのおつかいを少しづつこなしている間に真一の携帯にメールが届く

それは少し前に連絡先を交換したマスターからの連絡だった

——君に対し、私はどのような言葉に接するべきかわからない  
だが、先日のことについては感謝を述べるべきだろう、見逃してくれてありがとう

君の事はヤタベさんから色々と聞いた

友達の事や秋葉原自警団の事とかね

：私は君の優しさを信じて、一つ賭けをしようと思う

君に会つてもらいたい人がいるんだ

その人物のコードネームは「エックス」

メールでは危険が孕んでいるので詳しくは話せない

君自身が「エックス」に接触してもらいたい

このコードネームを知っているのは君だけだ、裏通りにいるメイドに向かつてあのコードネームを呴いてくれ

「エックス」に取り次いでくれるはずだ——

そんなことが書かれていた

「… “エックス” …？」

誰だろう、那人

その単語だけでは女性なのか男性なのかもわからぬ

少なくとも人物を表すコードネームではありそうなのだが、正直に言つてそれしかわからない

とりあえず裏通りにいるというメイドにこれを聞きに行つてみよう

つていうか件の裏通りにはメイド喫茶があるし何かわかるかもしない

今回はアラタは少し戻らないといけない用事ができたみたいだし、自分が頑張らねばないといけないのだ

◇

## メイド喫茶前

その場には宣伝なのか、単純にバイトなのかわからないがチラシを配っているメイドの人がいる

今も通つていく客に向かつて笑顔と一緒にチラシを配つており、非常に手慣れている様子だ

「あの、すみません」

「あ、はいっ、なんでしようかご主人様！ もしかして、お店をご利用でしようか？」

「いえ、そうではなくつて…その、『ミスター・エックス』についてお聞きしたくつて…」

刹那、メイドの纏う雰囲気が若干変わる

笑顔のままではあるが、じつとこちらを見定めるように真一の目を見て

「…それでは、質問をしても宜しいでしようか？」

「え。質問？」

「はい、三つほど私から質問を投げかけさせてもらいます。その三つを答えることが出来れば、エックス様にお取次ぎいたします」

全く知らなかつた

というのも名前しか知らないからある意味当然ではあるか自分でも答えられる質問ならいいのだけども…

「では、行かせていただきます」

「よ、よし、来いつ

「問一、ITウイッチまりあの強さは、何に依存するでしょう」

ITウイッチまりあ関連の質問か…！

ITウイッチまりあ…それは現在第二期が好評放送中のアニメ作品だ

原作はマンガではあるのだが、色々語ると長いので今回は割愛させてもらう

「そいつは簡単だ、『使用したパソコン』に依存するツ！」

「正解です！ では問二、まりあが母親と離れて暮らす原因となつた

のはなんでしょう

「“お金の問題”つ！」

「また正解です！では最後、まりあを務める声優の名前は誰か！」

ラッキー問題だ、こんなのが知つてて当然の問題だ、ライトオタクではあるが、それでも一応オタクなのだ

「新谷光子！」

「——パーエクトですご主人様つ」

よし、と内心でガツツポーズをかます

ノブくんの教えが功を奏したみたいだ

：あの人の話マジで長かつたからな：一応頑張つて真面目に聞いたけど

「では少々お待ちください、今からミスターイエックス様にお取次ぎしますので」

メイドさんの言葉に真一はわかりましたと返事をしてふう、とその場で息を吐いて気分を落ち着かせる

ミスターイエックス：ここに来るまでは正直皆目見当もつかなかつたが、何となくここに来てうつすらとその正体を察することができたかもしれない

「お待たせしましたご主人様。こちらが、ミスターイエックス様でござります」

そう言つて彼女が連れてきたのが、真一も見知つた人だつた

「…やつぱり貴方だつたんですね、真一さん」

カリスマメイドと名をはせる、メイドのプロフェッショナル

サラがそこにいたのだ

変わらない笑顔を真一に振りまくと、隣のメイドに離れるよう命じると改めて真一に向き直る

「やつぱりサラさんだつたんですね」

「あら。真一さんは気づいていらしたんですか？」

「いえ、けどメイド喫茶に来て、もしかしたらつて思つた程度ですからはつきりとは」

「ふふ、聰明なお方です。マスターから会わせたいエージェントがい

ると聞いてピンときましたよ。安全に配慮して、このような会わせ方にしたのでしようね」

ふふふ、とサラが笑顔を作る

確かに頭が固いナイロのエージェント連中ではこういった問答は得意ではなさそうだ

オタク系統の問題にして正解と言えるだろう

「けど、どうしてサラさんが…。あ、もしかしてサラさんも…？」

「いいえ、私は普通の人間です。彼らのように年若い姿で居られるのは大変魅力的ですが、歳を経て、博識な初老のメイドとなり、一つのメイド道を極めるのも、私の遠い未来の“夢”ですから」

そういうサラの顔は真剣そのものだった

なんにせよ、はつきりとした自分の夢を持つていることは素晴らしいことだろう

「けど、具体的な支援つて一体…」

「主に住居などの秋葉原での暮らしのサポート、メイドとしての立ち居振る舞い、美味しいコーヒーの淹れ方…」

「コーヒーなんかも淹れてるんだ…」

勝手に紅茶のイメージが焼き付いてた

「メイドはイギリス発祥ということもあり、普段は紅茶ばかりですが、コーヒーも自信あるんですよ。今度宜しかったら、真一さんの好みに合わせたコーヒーをお淹れしますね」

「ははっ、はい。その時はぜひ」

美味しいんだろうなあ、などと味の想像を一度断ち切り、再度サラの話に耳を傾ける

「…切つ掛けは些細なことでした。ご存知かもしませんが、私は自分の店以外に、希望する方がいれば無償で指導をしているんです」

話には聞いたことはある

おかげで裏通りには結構なメイドがいるのだが

「“彼女ら”的グループに所属する一人の女性が、私の元でメイドとしての嗜みを学んでいました。彼女には、ご主人様に対する礼儀や、知識として吸収しようとする勤勉さ、そして何より、主の方へ、奉仕

しょうという強い思いがありました

カゲヤシの中にそんな人がいたのか

…やっぱりカゲヤシにも暴れたい人とそうでない人がいるのは間違いないのだろうか

「それは才能と呼ぶに相応しく、私も特に目をかけて育てていましたけど…家庭に問題がある、とのことで、なかなかお店に出てこれない現状でした…それを私は秋葉原界のメイド業界における損失と考え、公私ともに支えていこうと決めたのです」

あのサラにここまで言わせる、ということはその女の子は本当にすごい逸材だったのだろう

「…あと、別にいやらしい意味とかはございませんので、ご安心ください」

「いえ聞いてませんから！」

何を言つとるんだこの人は

「こほん。…それで、親しくなつていくうちに、自分の事情を話してくれました。最初は思春期にありがちな“邪氣眼”系か何かだと思つていたのですが…実情は大きく違いました。しかし、一度彼女を支えると心に誓つた私は関係ありませんでした。ですが、彼女はある時正体がエージェントに露見し、命を狙われるようになつてしましました。…自らの命が幾ばくも無いと察した彼女は、最後に私にメッセージを送り、その消息を絶ちました」

「…メッセージ？」

「はい。…“自分が仕えている大切な人を助けてあげてほしい”…ただそれだけでした」

自分の命に危機が迫つた状況だというのに、その子は尚も己の主を優先した

それがどれだけ勇気のある行動なのかは真一には推し量れない  
「そこ」にあつたのは、ただ主人への奉仕の心だけ。感銘を受けた私は、  
“彼女ら”に接触し、今の関係が始まったのです

「それが…サラさんの原典、というわけですね」

「はい。言い換えれば、私は彼女の意思を引き継いだ形になるわけで

す。誤解しないでほしいのですが、私が援助しているのは全てのカゲヤシというわけではありません」

「…？ それは、どういう…？」

「簡単にカゲヤシについて『』説明しますね。まず働きアリのような末端、彼らを束ねる妖主の子供たち…そして、組織を統括し、全体の意思決定を行う女王蜂のような妖主、カゲヤシというのは、この三種類で成り立っている種族なのです」

「…つまり、トップと幹部、それと末端がいる、みたいな感じですかね」「ええ、そのような認識で構いません。本来妖主の意思是全カゲヤシの意思、ということなのですが、子供たちの中に一人だけ、妖主の意思から離れて、独自の思想を持つものが現れました。私が支援しているのが、その人なのです」

「…独自の思想…ですか？」

「ええ、その人が掲げる思想——それは、『人間との共存』」

言葉を聞いて、真一はびっくりと身体を震わせる

「その人は秋葉原を訪れて、この街の自由さに可能性を見出しました。…この街は、全てを赦し、受け入れる。…それなら自分たちも…きっと…と…と」

「…だけど、それは今の妖主つて人からしたら…」

「ええ、正反対の思想です。ゆえに、小規模かつひそかに行動し、この街で生きる術を模索しているのです。今回、マスターを通して真一さんに接触を図ったのも、これに協力してほしいからです」

「！ …俺に、協力を…？」

「エージェントを裏切れ、というのではありません。先日貴方は、マスターの命を助けていただきました。同じように私が支援している方と戦う時になつた際に、見逃してあげてほしいのです。『彼女ら』は妖主の命を受けても、むやみに人を襲うことなどいたしません。水面下で動いてる故、やむを得ずということはあるかもしませんが…」「そうか。俺が協力できれば、そう言うケースも減らせる…と」

「はい。先日起こつた暴動みたいに、未然に防ぐことも可能なはずです。実はあれは、『彼女ら』に助けを求められ、私が自警団、そして

真一さんと鏡祢さんを誘導させていただきました」

まさか裏でそんなことをしていたのか、と真一は驚いた

「だますような真似をして申し訳ありません。ですが、助けていただきてありがとうございます。協力していただければ、互いの望まない戦いは避けられるはずです。そして今はまだ少数ですが、いずれ彼女たちが力を持つことができたときは…真一さんに、協力していただきたいのです」

サラはそうして自分を見つめてくる

ここまで話を聞いて、真一の心は決まっていた

「…ああ。俺でよかつたら喜んで」

「良かつた。…貴方ならそう言ってくれると思つてました。…そして、よろしかつたら今の話を、アラタさんにも共有していただいてもよろしいでしようか？」

「？ アラタに？」

「はい。彼はなんとなく、真一さんに近い感性をお持ちだと直感で感じたので」

それは真一もなんとなく思っていた

そつくり、というわけじゃないが、雰囲気が似てるというか

「分かりました。俺からアラタに伝えておきます」

「ありがとうございます。…それと、自警団の皆様には、ご内密にお願いします。…いずれ話すときは来ると思いますけど、今はまだ…」

彼らはちよつと素直すぎる印象があるからなあ、と真一は心の中で思う

「それでは真一さん、何か決まつたらまたご連絡いたします。本日はお時間いただきありがとうございました」

そう言つてメイドらしい美しい所作で礼をするとその場を去つていった

真一はそれを見送るとふう、とひとつ息を吐く

もしかしたら…カゲヤシと戦わない未来が、来るのかもしれない…

## #10 穏健派

「ふーん、そんなことがあつたのか」

私用で少し伽藍の堂へ帰つて、戻つてきたら真一からそんな話を聞かされる

末端に妖主、と来たか

戦いたくないカゲヤシもいるというのはいい情報かもしれない  
最も、瀬島がそれを聞き入れるとは思えないが

「そんで。面会をセッティングしてくれるんだろう？」 サラさんは  
「ああ。準備ができたら俺にメールを送つてくれるつて…つと、言つ  
てるそばから」

アラタに顔を向けながら真一が話しているとピリリとメールの送  
信を知らせる着信音が鳴り響く

携帯を取り出し画面に視線を向けるとそこにはサラからのメール  
が届いていた

### ◇

#### 面会場所のお知らせ

サラです

面会の場となる場所が決まりましたので、ご連絡させていただきま  
す

まず屋上へ向かってください

そこにそれらしい人を見かけたら“合言葉”の方をその人に仰つ  
てください  
まどろつこしいかもしませんが、念のためという措置ですのうど  
うかお願ひいたします

合言葉は、私が勤めているメイド喫茶の店名です

### ◇

「…メイド喫茶？ …ああ、そういえばサラさんつてメイド喫茶で働

いてんだつけ。自警団のアジト行くと大体いるから実感なかつた」

アラタが頭を搔く

そうなのだ

自警団のアジトに行くと大体サラがほかの皆と談笑したり紅茶を入れてたりするので正直真一自身も忘れていたくらいだ  
「とりあえず、屋上だろ？ 善は急げだ、早く行こうぜ」

「ああ、わかつてるよ」

◇◇◇

そんな訳で、屋上に到着したはいいのだが  
「いーじやんよお、俺たちにちょっと街を案内してくれるだけでいいんだつてばあ」

「だ、だけど私を待ち合わせをしてて…」

「さつきから一人でいんじやん？ きっとその相手には別の用事が入つたんだよオ」

「で、でもお…」

「いいからいいから。俺たちと遊びに行こうよー」

スゴイ典型的なナンパの場面に目撃してしまつた  
真一とアラタははあ、とため息をつく  
というかめつちや知つてる人だつた

「——あ！ アラタさんっ！」

三人からナンパされている女の子——鈴がアラタの顔を見て笑みを浮かべる

知り合いなの？ と怪訝な顔をする真一に「ちょっとね」と短い返事を返しつつアラタは一步前に出て

「悪いな、その子と待ち合わせしていくね」

「ああ？ なんだお前？」

カーディガンを着込んだ三人のうち一人がこちらに向かつてガンを飛ばしてくる

こちとら目の前のチンピラ程度に怯むようなやわなモノでもない

ので、素知らぬ顔で受け流しつつ

「友達さ。それに、秋葉原を案内してほしいならしてあげるよ、彼が」

「え？ 僕？」

しつと促された真一がびくりと肩を震わせながらアラタに向かって返答する

「つたくよお…わかんねえかなあ、お前らみたいなやつらに案内しても意味がねえんだよ」

「意味がないとは変だなあ。観光目的なら一緒じゃないの」

「男に案内してもらつても嬉しかねえんだよ！」

「だから別に案内役が野郎でも問題ないじやん、誰に案内されたつて

――

「だーかーらー！ 不良にも“萌え”はあるんだよ！」

…お、おう

「ああもうイラつくわこいつら！ 服引っ張がして川にでもぶちこんでやろうぜ！」

リーダー格のカー＝デイガンがえらいこと言いました  
それに乗つかつてカー＝デイガンBとカー＝デイガンCが同意して

「こつからだと神田川か」

「都市部を流れる川だ、裸じやあ出るも地獄出ないも地獄！」

「覚悟しやがれ!!」

そんな訳でカー＝デイガン三人衆が襲つてきた

◇

「お、覚えてやがれ!!」

勝ちました

日頃から争いには多少心得があり、かつカゲヤシとなつたことで身体能力が向上した真一にそもそも戦闘に慣れているアラタ

二人を前にすればその辺のチンピラなど何人来ようが敵ではなかつた

「あ、ありがとうございます。助かりました…」

はうはう、と言った様子で女の子——鈴がぺこりと頭を下げる

「アラタさんは別として…そっちの方とは二回目…でしたよね。私は森泉鈴と申します」

「あ、どうも『丁寧に。俺は須藤真一って言います』

「真一さん、ですね。改めてありがとうございました——あ、そう  
だつ、合言葉つ」

そう言うとうーんと、と考えながらやがて思いついたようにハツと  
した表情を浮かべると

「“あなたのオススメのメイド喫茶はどこですか”？」

合言葉の問い合わせが来た

しかしアラタはその店を知らない

だからちらりと真一へと視線を移すと彼は頷いて

「“カフェ・エディンバラ”」

そう言葉を言うと鈴はぱあっと笑みを浮かべて

「正解ですっ。…よかつたあ…これで違うお店の名前出されたらどう  
しようかと…あ、でもアラタさんいるから大丈夫、なの、かな?」

それは流石にダメだと思う、と真一とアラタは思ったが口には出さ  
ないでおく

んん、と空気を変えて真一は鈴に問いかけた

「その、君がサラさんの言つてた?」

「あ、いえ。私は代理のモノです。普段は、瑠衣ちゃんに認められて、  
彼女の従者のようなことをしています」

従者とかそういうのあるんだ

「先ほど自己紹介はしたと思ひますが、改めて。私は森泉鈴。瑠衣  
ちゃんの補佐役…という建前ですが、先ほど言つた通り、従者みたい  
な感じです。一応これでも、他のカゲヤシを指揮する側ではあるんで  
すよ」

そこから鈴は簡単にカゲヤシの内情を説明してくれた

カゲヤシには大きく分けて三グループあり、頂点が妖主、そしてそ  
の下に幹部、さらに下に末端、といつた感じらしい  
どうやら上下関係はどこに行つてもついて回るみたいだ

「私ももともと末端だったんですが、瑠衣に抜擢されて補佐役みたい  
なことをさせていただいてます。…あ、すいません私はかり話してし  
まつて。今話さないといけないのはそんなのじやありませんよね」  
「いや、そんなことないよ。ね、アラタ」

「そうだな。必要なことでもあるし…。俺からも聞いておきたいのは

一つ

？」

「どどのつまり、君らは俺たちに何をしてほしいか、だ。…まあなんとなく察しはつくけれど」

「えつと、ですね。あなたたちだけでも、私たちと敵対しないでほしいなって、いう、そういうお願ひなんですけど…」

「いいよ？」

「おつけー」

「や、やつぱり難しいですよね…——え？」

まさかの二つ返事に鈴は一瞬固まつた

「い、いいんですか!? そんなあつさり!？」

「全然。普通に俺たちと話してるその感じも人間のそれだし」

「俺たちとこうして一緒にいられるのなら、共存も遠い話じやないと  
思うから」

真一とアラタの言葉に鈴はぱあ、と笑顔になつた

それこそ本当にうれしそうに彼女は言葉を続けていく

「そ、そうですよね！ こうして私たちと友達になれたらんですし！  
人間との共存だつて夢物語じやありませんよね！ 今襲つてる末端  
のカゲヤシは妖主の意志に従つてるだけなんです！ 共存の道を模  
索している瑠衣ちゃんがトップになれば、必然的に人を襲うカゲヤシ  
はいなくなるんです！ なんてつたつて、瑠衣ちゃんは“次の妖主”  
なんですからっ！」

ヒートアップしてどんどん言葉が出てくる鈴

つていうか言葉の中に結構大事な単語が出てきたような気がする  
「…あ？ あああああ！」

本人もそれに気づいたのか慌てて自分の言葉を手で押さえキヨド  
り始める

「す、すいませんすいません今のナシっ！ 聞かなかつたことにして

ください！」

「え。えつと？」

「お、落ち着いて。別に誰にも言うつもりなんてないし」「す、すいませんすいません!! 忘れてくださいっ！ なんでもするから忘れてくださいい！」

「今なんでもするつて言つたよね？（ゲス顔）そんな感じでうつかり真一の顔が条件反射で変わつてしまつたのでアラタが軽くドついて戻しておく

「もういい」

そんな鈴の言葉を切り裂くように一人の女性の言葉が耳に入つてくる

そつちに視線を向けるとそこには黒く美しい長髪を棚引かせた一人の女性が歩いてきていた

文月瑠衣その人だ

「ど、どうしてここに!? 危険だからまずは私が…！」

「鈴の様子が心配だから見に来たの」

「え？ …じゃあ、今来たの？」

「うん。そう」

「そ、そなんだ…よかつ——」

「鈴が私の秘密をばらしたところは見てたけど

「うああああああ」

頭を抱える鈴

瑠衣はこう見えて割とSなのかもしれない

「ごめんごめん、ちよつといたずらしただけ。怒つてないから安心して。それに私が出向かず、詳細を隠したままで君に協力を乞うのも失礼だからね」

真一は別に気にはしないと思うけど、とアラタは内心で呟いておく  
あうあうとしている鈴の肩を軽くたたきながら瑠衣は真一へと視線を向けて

「真一、だつたよね。そしてそつちの人は——」

「アラタ。鏡祢アラタだ。よろしく、文月さん」

「ひとまず場所を変えよう。さつきので騒ぎになるかもしれないし」「わかった。場所は？」

「公園にしよう。先に行つてるね」

「わかつた」

瑠衣の言葉に同意して、一度その場は解散となる

公園、か

そこは確か真一と瑠衣が二度目に邂逅した場所だった気がする  
「応エージェントに警戒されても面倒だから、真一、そこにはお前一人でいって来たらどうだ?」

「え?」

「気になつてるんだろう? あの文月つて子」

「あ…わかつちやう…?」

ポリポリと頬を搔く真一  
彼女が来た刹那からちらちらと様子を伺っていたのはバレバレである

「周囲にエージェントが来たら俺が連絡するから。な」

「あ、ありがとう…それじゃあ、お言葉に甘えて」

妙な気遣いをしてくれる

無論とてもありがたい申し出ではあるので、ここは素直に彼の厚意に甘えるとしよう

◇◇◇

「あ、来たみたいだね。…あれ? もう一人の彼は?」

「エージェントが来ないか見張つてるつて。いざとなれば合流できる位置にいるから、大丈夫だよ」

件の公園へと足を踏み入れた時、ベンチに座つて待つていた瑠衣から手招きを受けて、真一は隣に座つた

自動販売機で購入していたのか、彼女はミネラルウォーターのペットボトルを持つており、半分くらい減っているようだ  
待たせてしまつたかな

「…なんだか不思議だね」

「え?」

「ちょっと前までは命のやり取りしてたのに、今はこうして隣同士で座つてゐる。…こんな状況が不思議だなつて思つちやつた」

「――。そう、だね。けど、こんな風に俺たちは言葉を交わせるんだ。きっと共存だつてできるよ」

「真一…そう言つてくれるととつても嬉しい。こうして普通に話を続けたいけど、まずは本題に入らないとね」

かきよ、と蓋を開けたミネラルウォーターを一口流し込むと瑠衣は表情を真剣な顔つきへと変化させる

「だいたいのことはサラさんから聞いたと思う。私たちからのお願いは私を支持してくれる人たちに攻撃しないこと、万が一その人たちに何かあつたら、できればいいんだけど、助けてほしい。：一般人相手になんて加減がわからないから、最悪殺しちゃうかもしれないから。都合のいいことなのは理解してる。：だけど、それが今の素直な気持ち。……ここまで何かあるかな？」

「うーん…協力するのには全然問題ないとして…一応聞いておくけど、君が次期妖主、つてやつなの？」

「うん。そう」

意外とあっさり肯定の言葉が出た

もつとトップシークレットなのかと思つたゆえに、これは少し意外だつた

「これは君を除いた、エージェントにも知られていないこと。おそらく連中は私の姉を次期妖主だと思つているはず。そう見えるように母さんが仕組んだの。…えつと、鈴からはどうなふうに？」

先ほど鈴から受けた話を簡潔にまとめて、真一は瑠衣にそのことを話した

「…妖主、眷属、末端…うん、だいたい合つてるね。あの子、結構うつかりしててるから、どんな説明になつてるか、ちょっと不安だつたんだ」あれをうつかりで済ましていいレベルではないと思うけど

と、内心真一は苦笑いと共に思つたが口には出さないことにする「私のほかに秋葉にいるのは、母の兄、つまり叔父にあたる姉小路瞬、そして兄であり、君と因縁のある阿倍野優、そして二人の姉…合計五人。その二人の姉が秋葉のカゲヤシを実質的に管理して、狙われている母さんの代理者となり、『引きこもり化計画』の実行者として、眷

属、末端を統べている…」

「なるほど。エージェントたちがその姉二人を次期妖主だと思い込むわけだ」

「もしかしたら、秋葉のカゲヤシを管理してゐる人が二人いる、つていうことにも感づいていないかもだけど。真一は何か聞いてない?」

「いいや。何にも」

「そうなんだ。ともかく、その二人が指揮することで、エージェントの目を引き付ける役目と同時に、末妹である私の指導役、ということになつてゐるの。…だけど、次の妖主は私。いずれ、私がカゲヤシを率いる立場になると思う。そうすれば、私たち稳健派のグループが……」

――

不意に何かを考えだす瑠衣

真一は頭に疑問符を浮かべながら次の言葉を待つ

「…稳健派。稳健派か…ちょっとといいなあ、これ。優しそうな響きで、それでいてちょっと格好いい。うん、これからは稳健派と呼ばうつ」

ただ可愛いだけだつた

「…あ。それだと母さんたちは武闘派か。…くそ、ちょっとカッコイイな」

可愛さが果てしない

「そ、それはそうと! どうして秋葉で」

「母さんが言うには、秋葉原に集う若者が将来日本を支える人材に育つ確率が高いから、なんだつて。情熱的で行動力もあり、それでいて高い学力がある若者が集う場所…他にある?」

探せば割とあるかもしれない

だが着眼点は意外と悪くないかもしれない

基本的にオタクのイメージが強い街ではあるがその実、学力の高い連中もいるかもしれない

経済を支えるかどうかは――――わからないけど

「加えて複雑な街の作り、多種多様な人々が集まることで生まれる潜伏のしやすさ…それは必ず追つてくるエージェントとの戦いのため、すべてが理想的だつた。想定外なのは夜の八時を超えるとお店が

どんどん閉まつちやうから、街から人が一気に少なくなるつてことかな、それで危険な日中にも活動せざるを得なくなつて…」

そんなこんなで色々な話を瑠衣から真一は聞いた

どうやらカゲヤシも色々と大変そうなことには違ひなさそう、というのが個人の見解である

当然この話はナイロに報告する気はないし、共有するにしてもアラタとしかしないだろう

エージェントにも聞かれてはいないだろうし、多少はこれで安心したか

「——ふー。サラさん以外とこんなにお話したことなかつたから、ちよつと疲れちゃつたかも」

「そなんなんだ？」

「うん。母さんから人間なんかと接触してはいけないって言われてたんだ。だから、この街に来るまで、私は人間と話したことなかつたんだ」

「そうだつたのか…」

少し意外だ

「母さんはいつつも、姿形は似ていても、人間は恐ろしい生き物だつて言つて、聞かなかつたから。近づけば、手痛く傷つけられるつて、よく言つてた。正直、私も何回もエージェントたちに仲間が狩られていくのを見てたから、信じてたんだけど…母さんと離れて、この街で過ごしてみて、触れてみたら、全然違つてた」

「…どんな風に？」

彼女の言葉に相づちを打つ

そして時たまこんな言葉を投げかける

当たり障りのない子の言葉の応酬が、なんか楽しかつたから

「うん、みんな個性的で、いろんな人がいて、見てるだけでも面白い。でもこれは姉さんたちが言うには、私たちという種を知らないからだつて。バレたら絶対にひどい目に遭うのは間違ひないつて、そういう言われるんだけど、ね」

でも、と彼女は言葉を区切つて

「逆に人間のフリを続ければ、ずっとこの街で人間として暮らしていくんじやないかって。そう、思えてさ。…そう考えたら、なんで戦わないといけないのか、わからなくなつて…ねえ、真一。…真一は私の考え、間違つてる?」

「間違つてないよ。…少なくとも、もう君と俺は普通に話してるじゃないか」

「――！　ふふつ、そうだね。なんだか勇氣もらつたかも。…つと、メールだ…ごめんね…つてあれ?」

断りを入れて携帯を確認したとき、瑠衣の顔が驚きの表情に変わる「おじさんと鈴からメールがこんなに…？　すごい、真一と話してたから全然気付かなかつた！　あはは…すごい心配してる」

確かに言われてみれば結構な時間が経つていてる気がする

携帯を自分も出して時間を確認してみると…一時間は話していたみたいだ

「もつとお話したいけど、今日はここまで、かな。…ねえ真一。また、会つてくれる、かな」

少し遠慮がちに言つてくる彼女に、少し真一は心打たれた  
ちよつと上目遣いな感じで問いかけてくる彼女に、真一は迷うことなく

「うん、いいよ」

「！　ありがとう。…ということは、もう真一と私は仲間…じゃなくつて、友達、だね」

「そうだね、友達だ、俺たちは」

「ふふつ。それじやあ、困つたことがあつたら助けてもらうからね。元々友達のために危険を顧みないで夜の秋葉原に来てたぐらい仲間想いなんだし。…それに、そういうところがすつづくいいなつて。人間っぽくてすごくいいなつて、そう思つたから。君のこと助けたい、助けなきやつて、なつたんだし」

「瑠衣…」

そういう彼女の顔はどこか儂げで、憧れのようなものも垣間見えて…それでいてどことなく、美しくて

元々見惚れていたが、更に一瞬見惚れてしまつた

「——うん。君と友達になれてよかつた。それじゃあ、またねつ」

そう言つて彼女は手を振つてこの場を離れていく

真一はその後ろ姿を見送つて、彼女も時折こつちを振り向いて何度も手を振つていた

結構大変なことに巻き込まれたとは思う

だが、瑠衣のためならと思うと、全然苦ではない

自分だつて、一人ではないのだから